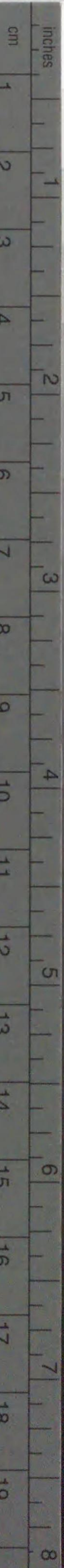


Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

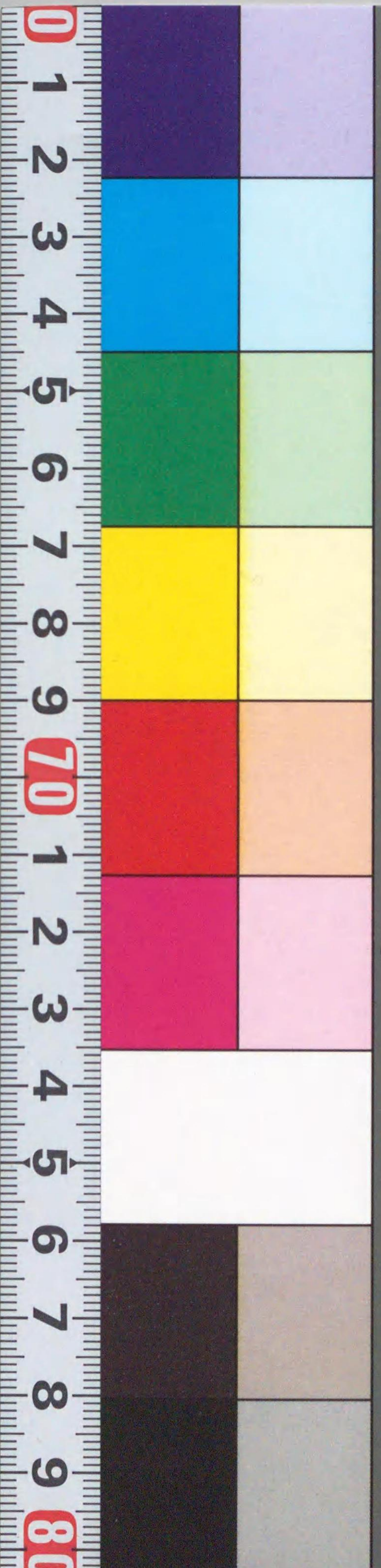
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



增補雅言集臨見

十四

813.6
I619g
NND

たのめりおきし露のいよぞ此類のりの詞の玉緒は多く出たれをこ、よの擧ぎ
かカハの心源夕顔廿七人をおれたる所は心とけていぬる物り同横笛三り、る夜の月
よ心やすく夢見る人のある物の

か是は軽く添たる詞にて同紅葉賀一四とせをりりりあいのよおをられた同
いさ、か疑の心あり同紅葉賀一四とせをりりりあいのよおをられた同
七廿常の事をれど人ひとまのあまたしも見給へぬ事をれをあやたぐひかくおひ
しこがれたり

か蚊和名抄十九蚊和名廿二加小飛蟲夏月夜噬人者也夫木九後「夏の夜の枕をこた
る蚊の聲のまつりよたよもいこそねらきね蚊の眉國郡六帖四「かの眉は國郡を
ばたてつとも人の心をいりたのまん蚊のまつけ夫廿七「目よえぬ鳥も世よ
ふるものよどりのまつけよも集いつくるあり

か香花の香。梅が香抄するよ不及拾神樂「さりきさのをかくもいとめく
れバやそうぢ人ぞまとぬせりける國史五七延暦十六年冬十月菊のそなちりぞを
ぬべきあたらその香を古射恒「月夜よいそれともえぬ梅の花をたづねてぞ
いるべりりける後拾遺春上滑「風ふけバをちの垣ねの梅の花の我宿のものよ
を有ける古今冬「花の色は雪よまどりてえぬともをたふよへ人のある

べく源蓬生廿いとあつりきりたるを同やとりき五あなめでたの物のり

や同わうな下八紙のりかといとえんあおとさらめきたるりきさまかり同夢のう
きと一紙のりかど例の世づりぬまぞいとたり補うつ不樓の上四いといとき

か荷ワリコ。炭うつほ藏開上ノ「とりこ五十荷。宇治拾遺さたが段ヲ見ルニ
りハヨリハナメゲナルニヤ

か拾遺雜下「かをさして馬といふ人有りけれをかもをもととおもふなほべい
和名十八鹿、和名加、班獸也爾雅集注云牡鹿曰麋日本紀私記云其子曰麋和名補鹿
十五

方一秋さらば今も見るごとつままひは鹿かかん山ぞさり野原のうへ
ガ古冬「梅の花云々左注此哥のある人のいそく柿の本の人丸が哥あり同賀

「つるりめも云々左注此哥のある人の在原のときさるがともいふ補新古雜中「久
方にあまつをとめが夏ころも雲るにさらす布引の瀧枕五今上一の宮またこら
まてれそしますますが御おぢよ云々月詣雜下法皇とこよおそしまける時侍のよさよ
てもべりけるが今の北面よさふらひながら方四十六をぞしこが花とよめる三
首あま

〔ガ〕^{四ノ}十六「吾き、おかけてかいひそりりでものこたれて思ふ君がた、うろ(源
タウヤ) ^十四ちひさき子どもあとの侍るごとあやまをまつべきも。此下ノハカ

リニ人ノ事ノ者ノト譯シミルベシ(源 かりつや) ^初いとやんごとなきさまよのあら
ぬがそぐれて時めき給ふありけり(同 帝木) ^七もとのねさしいやーからぬがやそら

かお身をもてかーふるまひたるいとかわらりありや(同) ^十息の下よひきいれおと
せくおなるがいとよくもてかくまありけり(同 夕顔) ^七りのなきがらを見ざらん

がいといおせりるべきを(同) ^九打すて、まどい給ふがいとよきこと、(同) ^卅云々
としてたつがいとりかーくおさるれば(同 紅葉賀) ^十覺えやんとかくおむするが

官腹よ一人いつきりーづき給ふ御心ををりいとこよなくてのガ ^{是ハ物の心なり} (源 葵)
^{五十}とぞりけの御さうぞくなど例のやうまーけられたるよ女のガあらぬころ
かへてさうーくもえなけれ

〔ガ〕^賀 四十 五十 六十 七十 八十 (古) ^賀 仁和の御時僧正遍昭お七十の賀給ひ
れる時の御哥(同) ^同さたやそのここの後の宮の五十の賀奉る御屏風よ ^{云々} (同) ^同

やうぢの賀よ(同) ^同藤原三善ガ六十賀よよとける(同) ^同よそぢの賀を(源 せとめ)
^{五十}あけん年を五十よなり給ひけるを御賀の事たいのうへおぞーまうくるよ(同 藤

の裏華) ^廿あけん年よそぢよなり給ふべけれを御賀の事 ^{云々} (拾遺) ^賀 民部卿清貫ガ
六十賀中納言恆佐妻ー侍りける時の屏風よ ^{云々}

〔かい〕 ^權 (和名) ^{十一}棹釋名云在旁撥水曰權伊權於水中且進權也(万) ^{廿九} (新
古) ^秋上「このめふべふりくるあめハ彦星のそやく舟の權比あるかも(源 すま) ^廿

まことよ三千里の外の心ちするよかいの事もたへガさー(万) ^{卅七} あまふねよま
かぢかいぬき(新後拾) ^{雜春} 昌家 「夜舟こぐかいのーづくやをけりらーぬる、さもとよ

やどる月りけ
〔かい〕 ^戒 (名義) ^{四ノ}十八云戸羅此云清凉 ^{云々} 又古師翻戒戒以防止爲義能防惡律儀無
作逸非止三業所起之惡故名防止(後撰) ^雜 京極のそやす所尼おをきて戒うけんと

て仁和寺よさそ侍りけれを(源 てからひ) ^四いむことの中にやぶる戒のおそから
めど(散木) ^{卅二} その蓮あハ戒をさもちたる人なんうまるといふ事を釋教部「一つの

國のおよこのこともたれればあーからぬ身とからまーもの城
〔かい〕 ^搔 掃 (万) ^{十六} 十八「玉もまきかりこかは、ろむろの木とかつめがもと、かき
もかんため(源 蓬生) ^六つや、あにかいときあどすは人もなー塵ハつめれども

〔かい〕 ^心 心 カイマミの傍し出す

かいそなつ 播放。戸をあく(源 浮舟)七思ひもよらぬかいそなつ(同 玉かつら)卅
たり給ふ方の戸を右近かいそなてを

かいそさむ (崇峻紀)八 弛弓挾腋向山走去

かいそぢる 搔細(源をとめ)廿 忍ひて人よ物の給ふとて立給へりけるをやをらかい
不そりて

かいともい (つれい)廿三 夜の御殿のををかいとともいとうよなどいふ又めでた

(年中行事哥合)寄夜御殿戀 良冬 「立をひて消ぬれもひのくるいきんかいともいせ
一人のおもりけ 夜のおとと申の天子の御寝所あり劍璽をおかる、故よいづれも燈
火をけさばこれをかいともいと申よや大かた夜のおとと内侍など
ぬことと侍るとかや

かいわぐむ わの部よ出す

かいかいこまる (今物語)三 におとくの一首にさせといそれればかいかいこ
まりて

かい (榮 月の宴)廿九 ところかいとなき給ふあうれいと思ひて後の御事ども
を思ひささぐとどぞ 雅望考ルニ是ハかいの誤リトアリ

かい 搔手折(十訓抄)二 御堂入道殿さかくれいける時師内大臣の御車に

乗具一て一條攝政の許へおへりけるに牛の逸物にて辻のかいたをりなどをおも
ろくありさまなりけれ此牛のいミトき逸物かな カイマガリト同

かい (曾丹集)「こきもこげけさのあさをひりされてせあさへあまりかい
たゆまりを(夫)卅 一よもそがら物思ふときのためくらいかいたゆきこそ忘れさ
りけれ

かい 戒壇。淳和天皇天長二年乙巳敕賜近江稻九万束同四年建立戒壇堂葺檜
皮五間堂上有金銅覆鉢鉢上有寶形壇一基高六尺七寸長二丈八尺廣二丈安置金
色座像釋迦帝王編年記弘仁十三年六月參議左大辨藤原朝臣家業可立戒壇帶宣
旨(新拾遺)二 延曆寺戒壇更お作りて澄覺法親王受戒おこなひける時 法源全「法
比道むりいよかへる時よあひて今もかえらぬ教をぞきく

かい (源 うつせ)九 ことこの、口よかいをひてかくれ立給へま

かい 海賊(和名抄)十一 後漢書云海賊張伯路冠略綠海九郡(土佐日記)六 海賊む
くひせんといふることせれもふうへよ海のまおそろいけれを(源 玉かつら)十
海賊の舟よあらんちいさき舟のとぶやうよてくるなどいふもあり

かい (伊勢物)昔男逍遙い思ふどちかいつら終て和泉國へ二月をりりよ

いさけり

かまつらね

是ハ心異なれば別に出ず但音便ハ相通ハ一といふべし

附かきつれ

(源 盤) 二 せげさちりきつれ参りてさまあとお今めりしくあそびくら

給ふ

かいつくろふ

(白文) 七 行十二ノカイツククロフテ 十七 整頓衣裳起 斂客

かいつくろひ

語の(枕) 五ノ五節の所 行事の藏人いときびうもてかいてけい

つくろひ二人

さらもより外にいるまどとおさへて云々

かいつく

搔付(枕) 七ノ卯槌の木のよりらんきりておろせ云々 引ぬるがすにあやふ

がりて猿のやうよりいつきておるもをり(同) 八ノうつくしき物をりけなる兒

のありらさまよいさきてうつくしむをどかいつきてねいりさるもらうさ

補

かいつもの(うつねあて宮) なまものからものそいものういつもの(今昔) 磯よ

いで、貝つ物をひろふに

かいねり

ノ名(大和) 注 表裏紅ノ打タル物也(大和) 三平仲「も、いさの袂の敷ハミ

いりどもわきておもひの色ぞこひいさ。それかんいとこきかいねりきたりける(源

玉うつら)

廿 田舎びたるかいねりにきぬをどきて(女官節鈔) かいねりの事うけき

紅の糸りそりさるきぬなり(後照念院殿装束抄) 皆練 加伊練(西三装束抄) 表裏紅

打或裏張又云火色自冬至春(助無智秘抄) カイチリトハタマウラクレナ井ノハリタ

ルニテ中へモナキナリ

かいかづ

(神代紀) 五 置一 少女撫而哭之(源 末つむ) 卅 さむき霜朝よりいねり

このめる鼻のいろあひやとえつらん

かいかで

体の語(末摘) 注(箋) 箏ヨリイデタル詞ナリ初心ノ時ハ手一ツニ六筋

ノ絃ガ明カニ知レズ心ヤリバカリナル物也(明石) 注 宜長云カイナデトモアリテ

是ハ琴ヲヒクコニハ限ラズ万ノ藝ニイフコニテ只物ノウハベヲ撫タル斗リニテ中

ノコチバ知ラザルゴトク深キコハナクタミ一ワタリナルナイフ注ヒガコ也。今案

ルニ一通リト譯スベキカ(瀨松) 後見召仕フ女ノコチイフヤウナレド猶ヨノツ

子人ノ心ナルベシ(源 末つむ) 卅 いとかれてひとりこつをよきまへあらねどかうや

うのかいかであたまあらまゝをとかへはくくちぞ(瀨松) 二 御足参らせさせ

給へんとて来ぬ云々ゆほされありつる足もおさへ給へりとしてひきよせ給へも云々

らうさけなほけいさかいかでの人と覺えせいと折く所せけよもてこづらふよ

うれへいふ娘よこそあらめ

かきあで(源 明石)九 只今世も名をとれる人々かきあでの心やりむりよのこ
る琴ニノミイフ別ニ出ス

かいで(枕)十 病の事をかいでひたるやうにやめ奉りしむ補(宇治拾)あ
りておあととりたをくりいのでひたるやうにやめ奉りしむ

がいのこ(ろ) 害の末の害す
かいの(一) 戒師(源 若葉)十五 御かいの師いむ事のそぐれたるよ一佛も申はよも(宇
治拾)九 三條大きさいの宮尼よからせ給えんとて戒師のためよめよ一つりよさ
れければ 云々 長き御髪を 云々 此上人よよさませらる

かいぐ 皆具(盛衰)十四 よろひかぶと皆具たびてけり

補 かいくらととき(著聞)十七 かいくらと時よ小六條よて

かいはる(源 若紫)九 かいやりたる額つき

かきやる(夫)六 戀(新六)五 知家「今も猶心よか、るわくれりを髪かきやりし人のう
しろで(つ)つ(櫻の上)下、一髪かきやり給ふ手つきいとうつくしけかり(源 夕霧)七十
いとうたてとれたる御ぐいかきやまかどして

かいまくる(枕)二 男のきぬ(直衣)うへのきぬ狩衣も袖ういまくりよろづさ
いれ帯つよくゆふよく

かいま(垣間) 体の語のぞき(日本紀) 視其私屏カイマミト點セリ(いせ物) 初段
此男かいまとてけり(源 空蟬)六 かいまとをどいまさし給えざりつる事を(同)
同 われよかいまとせさせよとの給へ(同 夕顔)八 時よかり垣のういまと侍るよ

附 かいまむ 是れ用の語よつりへる也(更科日記) さちぎ、ういまむ人のけそひ
ていといとく物つ、ま(竹とり)やとの夜よもこ、うよこよりのぞきういまみ

(伊勢物) 此男かいまとてけり(同)六 女男の家あいまてかいまとけると(大和物)
ひさしくいりざりければつ、ま(く)てとてりけりさてりいまえはこれよよくて
見えしと 云々

附 かいま(枕)三 女ねおささる顔をいよよきといへばある人の局よ行きて
かいまとて 云々 補(枕)四 屏風もおしあけつればういまとの人りくれとのとら

れたるこ、ちして(落窪)一 少將つくりしとらいまふたり

補 かいけつ(大和)二 段 あひてものもいそんとおもひていさければかいけつや
うほうせよけり(宇治拾)十二 融のおどろいけつやうよせぬ

がいふん(明月記) 嘉録元十二月廿三日 云々 答云本自存此守不顧身涯分可申入由許讓退

出云々。外聞と（下學集）下涯分隨分之義也。ヅンブン思フマシナリ

かいぶ海部。大波は貝貝かど初花四十二。ちろがねの御衣はこかいぶれりせてちろ

らいなども例のことかれどこまやちろをりしきを源玉つら四十あさはかたの

かいぶのおり物補（狭）三下裳あをきりいぶせんれうまらんれいさたて、

補かいふ（宇治拾）十四、りいふてあぐるをれひつきてくれバ

かいこ狭髪いふ。うしろへさがりたるを前の方へふりこすをいふうつ（國讓）上、一

御ぐいのかかけかりしをかいこて見給へりしをいとうるハく覺えて七尺を

りりよぞ有りしらつき顔のやういとめでざりりき（源浮舟）六十此侍従をツカヒ

るて參る髪わきよりりいこてやうたいいとをりしき人あり（枕）九中納言の君

の紅の張りたるをきてくびより髪をりいこ給へりしを（狭）一下飛鳥井の

所ひとへ袴をりりをきて髪りいこかとする（同）三上尼まかりかんと思ひ

給ひて櫛の箱ささきをとり出て髪りいこて見給ふ（金葉）上物いひける女

の髪をりきこて見けるをよめる「朝寢髪誰手枕たごつけてけさわたよふ

りこて見る

かいこり馬（宇治拾）七條黒くり毛ある馬のたけ八き何まりをりりあるひ

らよめる迄身ふとくこえたるりいことかれバ額のもち月のやうよて白く見

えければ見てちめの、しりける聲かました迄かん

かいさぐる（万）四五一夢のちひくるしりりけりおとろきてりささぐれども

てよもふれねバ（源夕顔）廿をよかとりうのとてりいさぐり給ふいきもせせ（同

帝木）十とづら額髪をりささぐりて（遊仙居）三驚覺損之（著聞）十二、此梯ひや

くとしてたたるをりいさぐるよ

補がいき（榮うらくの別）がいきかどいふことをせさせ給ひて

かいちらぶ（源椎もと）一心やまりくりいちらべのりこうび出たる物の

音かと

かいちらぶ 垣代。契説よるよ武烈紀お見えたる宇多我岐と同く樂人をいふあるべい

（源紅葉賀）四かいちらぶかど殿上人地下も心ことかりと世の人よ思はれたるいうを

くの限りと、のへさせ給へり宰相ふたり左衛門督ひたり右の樂の事を行ふ云々

（同）五垣代四十人句こたりき紅葉のりけよ四十人のかいちらぶいひちらは吹たてた

る物の音ども補（著聞）十三兩貫首以下垣代よ立けり云々垣代よ殿上人ども立け

るよ（同）四垣代よ左大臣笙民部卿宗輔卿笛季兼朝臣篁築築

るよ（同）四垣代よ左大臣笙民部卿宗輔卿笛季兼朝臣篁築築

るよ（同）四垣代よ左大臣笙民部卿宗輔卿笛季兼朝臣篁築築

【かいちやく】介錯。後見人又せしする事よも云(明德記)下とかくイカ勞り介錯し進せけれ
ハ(同)三 御介錯も傍の人々云々(同)五 御内の御りひやくは難波の三位とのと申
女房の有けるは尋よりて宜ひけるハ(辨内侍日記)上 中納言のすけどのよく御りい
ちやくして下すたれおてとかくまぎらひしてぞ御こしよのめしける

【かいしき】搔鋪(釋聚雜要)一 上紙十八枚搔敷紙

【かいひそめ】ひそまかくるハのひろひよ近く差(源 未つむ)三 心をえりたちをど深き
出せよよく身シマクスルをいふ(源 玉かつら)初右返が心よ
方へえ知り侍らせかいひそめ人うどうもてあし給へを(源 母君女房云 今参りハと
くかいひそめたるものハ女君もお平したれと(同)九 此來る人もそづりしけもな
いたうかいひそめてかたよ心づりひたり(同 浮舟)五十。母君女房云 今参りハと
め給へやんごとなき御あきらひのさうとこそ何事もおいらりよ覺さめよりら
ぬ中とかりぬる而たりハこづらハし死事も有りぬべしかいひそめてさる心し給へ

【かいひく】(同 帝木)廿 かいひくつま音かきひく(應神)十 訶羅怒を盪よやましが阿摩
離琴よ菟句離訶積譬句耶云々

【補 かいひさ】(榮 鶴の林) 佛をいりもと奉る御たうくのそをかどさしあつまりて
りいひさとしてそらをあふぎていりて御身より、るもの、りせよもあらぬ身をり

その奉らんとおもひ云々

【かいもとあるト】垣下變。主人をたすけてとりもち(源 をとめ)八 お平しりいもとあ
るト甚ひさうよ侍りたうぶ(後撰)一 齋院のよそぎの垣下ハ殿上の人々まわり

て(月詣)上 養和二年三月ハ賀茂重保尚齒會おこさひ侍りける七隻よてよめる祝部
成伸歌云々 垣下よてよめる賀茂重政歌云々 瀧臣云重保尚齒會の時の垣下よてよ
る也清輔尚齒會記よも重家季經兩卿をよとめよて垣下の歌九首入たりき

【かいもちひ餅】(宇治拾)一 比叡比山ハ兒ありけり僧さちよひ乃つれくあいざり
いもちひせんといひけるを(つれく)二百十一 献まうちあそび二献よえび三献よ

かいもちひよてやとぬ(著聞)十六 其のちいされ高尾へりいもちひくれうといへ
をさらかりとてそこよりやがてぐしてさりをへ行まけり。廣足云カイ餅ハ今云齋
麥子リノコト也

【がいす】害(うつ) 俊蔭)中か、る物ハ害せらる、人ハ菩提もえがさき物かりとの給
ひて(竹取)八 龍ハ云々 それが玉をとらんとてそらの人々の害せられんとしけり

【附害の心】(うつ) 俊蔭)中 此けた物害ハ心なすやと見給へんとて
【かいす】(落く)六。石山詣の留守 かいすとして心平をけかれどわが君とうちりさら

ひてゐるゝるをよ

かろがろい(源 後悔大將)十物よりやうよかろい(源)いからぬ人の出てまゝりもいぬ

べりり(源 帯木)四十かろい(源)いき名さへどりをへん

附かろい(同)四十かろい(同)いきもひまぎれ立より給もんも人めあけりらん所

あびんなきふるまひやあらせれん(同)二十かろい(同)いきことさらびさること也(狭)

十八下いつりとかかる(同)いきそれをあととりせ給ふべきあらねも(源 夕ウ)

六びんかうかる(同)いき事もおもひへりへり(同 末摘)八やつれさる御

ありまひかる(同)いき事も出来なん(狭)四六いと俄よかる(同)いきさまよてこと

り給ひよけれも

かろらり(源 夕顔)十人此心をあせさらん事たあからりあえいもまぎれ給ふま

ト(同 明石)八いとくちをいきまこれるなり人こそ云々さやうよかろらりよかさら

ふこさをもすなれ(同 夕顔)二十かろらりようちれせ給へれば右近ぞけりける(同 橋姫)

四そぎせて給ひてりらりよてあたら車よて云々(宇治拾)三そこよおろさんと

いけれもいとろらりよおろされれも(源 常夏)五御覚えのやどいとろらり

なりや

附かろらり(同 末摘)八かろらりならぬ人此御をどを心ぐるいどぞれぞいける(同

あさうは)十かろらりあれいさちてあどのいさ給もぬ御けいきを心ぐるいとうとい

ふ(同 若紫)四十いとかるらりより死いた死て

かろむ(同 常夏)五もてけちかろむる事も人あよとなるれとゞかれも(同 葵)一あ

さうかろめ給ひぞといさめ給ふ(同 神)五十つ、む所あういり物せらるらんあよ

更よかろめろうせらる、よこそ(同 若紫)八さきりらむらへ給ひてかろめあ

さけり給ふ少くこれ人いえさてるまよき殿此内々か

附かろめいふ(同 ところ)四殿此人もゆるさきかるめいひ(同 をとめ)六世おと

ろふる末よ人よかるめあおづらる、よかろませ(同 玉うらつ)三ともかくもひき

たすけさせ給もん事こそ罪かるませ給もめと聞ゆ(源 若菜)下よいま此つ

とからむをりりれわざをせさせ給へ云々(同)御つとからむべりらんくどくのこと

と(同 若菜)上七おろそりあかろめ申給ふべきよ侍らねば

かろい(同 桐ゆ)四れのづりらかろきりよも見えいを(同 ところ)五えかろく

いれがさトか(夫)十俊成「いつりりときさの袂のからきりを秋の衣よとつよぞあ

りける(補 玉葉)春下津「よものおもいうづとささむるかさもあしあらよよかろき

もかのいらぬき(拾愚)上「いとひつるころも手かるゝむむろ山ゆふべの、ちの木
々の志とりせ

【かろび(源)】帝木初末の世よも聞つゝへてかろびとる名をやかぐさん(同竹川)藏人
玉うつらの姫君を望む所よ位の鼻き事をいとろびたるそとよ侍れどおやゝゆるす方もやとさん(枕)
三、虫の蟻ににくけれぢろびいとらうて水のうへなどをたゞ何ゆゑありくまを
をりしけれ

【りも(和名抄)】三ノ和名加波被也被體也(新六)五光俊「身をすて、後さへ人を戀を
れもさこそ骨と皮となるらん

【かま】彼者也多く川を兼てよ(後拾)五「かまとのとわさるをさるよかぐさまでくる
いさことぞいやまさりける(新葉)哀傷宗良親王「さそりりよつらさわりのをみつせ川
りもととかがらあとりへりてぬ(古)戀三よと「おもへども人目つ、このとりけれ
ぱりもと見かぐらえこそわら糸(後撰)戀二れか下所よて見りもかぐらえあひざ
りける女よ「かまと見てわたらぬ中よ流る、いもで物思ふ涙かりけり(中務)廿
「かまばたもけふいあふせときく物をかまとをりりや見てりへりかん(重之)三十や
んことかき所よめせばれ前よ出たるよ何とかく御覽とてりへさる、よつけて聞ゆ

「天の川とある千鳥のそねたぬときよをりもとも見てりへるりか(枕)「くづれよる
妹せの山の中かれもさらよよ一の、かまとさよ見(大和物)「故郷をりもと見
つ、もごたるりか淵せありとらうべもいひけり(かけるふ日記)「かまと見て行
ぬ心をかぐむれそいと、ぬ、いくいひやまつべき(六帖)貫之下「りもと見る道たよ
あると春霞かすめる方のさるりかる哉(齋宮女御)「かまと見てかけをかれ行水
のおもよりくりむからぬ身をいりよせん○みそかま(夫)廿「ゆふさちよをちのみ
ぞ川まさりつ、ふらぬ里までかぐれきよけり
りもいらぬ(和名抄)廿一吳茶菓 和名加波々之加美
【かま、らへ】川(稗)拾玉七「さもこそは川の瀬とにかま、らへるせきよもまよ
浪のすがぬき

【かま、らへ】川橋 さらの川(夫)廿一光明「打たれさらの川(中)さえてあさへ
をつとふ岸の青柳
かま、いら 川柱(更科日記)三 大きあるそいら川の中によつたてり 云々「くちもせ
ぬ此川もいらのこらぬむりりのあとをいりであらさ
かま不り 扇の(源)紅葉賀廿 かま不り此えから電るきさるを(同)わいな)下
事也(源)紅葉賀廿 八十一

よべのかそりりをれとして是ハ風ぬるくこそありけれとて御扇をれき給ひて(夫)廿七)和泉式部集)上 あふぎをらせてをらうらさちよこ、ろさすとて「今ハかくそかれ島ある我をればそりあつめたるかそりぞこそ(榮音樂)いろ／＼のかそりりともをひらめりいつりひたるけそひありさま(九條右大臣集)官よきこえ給ひけるころかそりりのあふぎ奉り給ふとて

○かそりり蟲ノ(和名抄)廿九 蝙蝠一名伏翼 和名加波保里 (大和)百七十 をたれもへりハかそりりにくされてところト一(和泉式部)「人もかく鳥もあはらむ鳥あては此かそりりもきとをたづねん

かそりね(和名)十七、骨蓬 和名加波保禰 味鹹大冷無毒根如腐骨花黄色莖頭著葉者也

かそべ 川邊 かそと 河門。川の瀬々の水の一つに成て(万)九ノ 狭き所を過るをいふとぞ 十七「山たりとあらぬ花

あれちさぎつまつこの川門とれどあかぬりも(万)九「河の瀬此さぎつをくれ玉もかもちりみたれてある此川常りも(万)四十八「千鳥をくさすの河門カハトの清き瀬を馬打わたすいつりかよもん(同)五「春さればわきへの里のかそとあはあゆこささるる君まぢがてあ○かそとまさるも此かそとの水まさる事也

かそとまさる(かけろふ日記)四 六日のつとめてより雨をトまりて三四日ふる川と

まさりて人流るといふ云々

かふつめ 河内女 (續後拾) 戀一、後一 「忍ぶればくるしきものを河内女のでぞめのいとの色は出せん(六帖)下「かうちめので染のいとをくり返しかさいとよ有とも絶んと思ふを

かそち(和名抄)三、額 和名加波知 額車也

かそちさのき(和名抄)廿四 賣子木 和名賀波知佐乃木

補かそちとり 河千鳥 (玉葉)六 射恒「けふくれてあはかの川のかそちとり日いまいにいく瀬をかあきこころらん(同)冬 俊成 「かそちとりおれもや物うれいきささのゆのり

を行かへりなく(同) 同永福 門院 「かそちとり月夜を寒といねぢあれやねさむるをよに聲のきこゆる(風雅)冬 増基 法師 「暁や近くあるらんもろともにかからせもかく河千鳥をか

かそり 代。俗ハ其カハリアノカ(狹衣)三ノ上。大將初高野お伴ひ給ハぬ人々さるべかりの代也体の語

き若上達部殿上人をとれくらりさせ給ひてけるうらめしさのかそりまわれもくときをひ出て(宇治拾)八、かく宿させ給へるかそりお亭やあるうみて奉らん

かそり 同ト心人の (源 玉うつら)九 母君のかひなくてさすらへてゆくへをたよ

あらぬかそりよ人をとく／＼よて見奉らんとこそ(同)いとかをしくてかくれ給ひい
を其かそりよいろうよつりうまつるべくかん(同)若紫)十何人からんりの人の御か
そりよ明くれあぐさめみ見をやと思ふ心うくつきぬ

かそり

代。同官職又舞
人あどよ

(枕)六

右衛門佐のぶりさへ

云々

筑前の守うせよかそりよ

がさ、れさりつるが俄よなやむ事ありてえまをせかりぬるかそりよめされさるを
りけり(源)さうさ)十とく／＼けどのの二月よ内侍のりまかり給ひぬ院の御思ひよ

やがて尾よかり給へる人のかそりなりけり(新勅撰)三

恒徳公兵衛佐よ侍りけるか

そりの少將よかり侍りて

云々

(狭)三)下今いもるけやらん方お死かそりよ

(万)八)五

「ささきりあひ雪もふらぬり梅花さりぬかそりよそへてたよみん

かそり

(源)浮舟)六

田舎人よものとのる人よてかそり

／＼さふらへを(枕)七)六

御

供の人のかの坊よなどいひてよびもてめけをかそり／＼ぞめく(榮)煙の後)六

皇后官とさふらへせ給ひて内わたりよもあらせせよさるべき折／＼なんかそ

りよ物御覽下などへのせらせ給ひける

かそり

代。人よ代る也物の

(源)まさこら

八)御りへり

いこ、よい聞えととりき

よく、覺いされをまろ聞えんとかさるもかたをらいさーや(古)秋寛平御時云々
人よかそりてよめる友則

かそり

(枕)七)公卿殿上人のかさる

／＼盃とりて(夫)十五)惟

高親王「八月よてりりむ

るべき紅葉さへりねてあらしの山ぞさびしき

かそり

(新古)哀

禎子内親王かくれ侍りて後禎子内親王かそりぬ侍りぬとき、て

かそり

かそり

世の中のうち替る又草木の色うつろひ替る又

(源)帯木)十

まことよいか

さるべき事とも思ふ給へばあがら日頃ふる迄せうをこもつりむさぎ(夫)十)家隆

「秋

風のふきよ一日より片岡のせこのかくねも色かさるかり(風雅)戀四)定家

たれよりとんつれあくてかさる心をさらばをへよ(新古)戀四)女御生子

「あさこど

りふりくもあらぬ青柳のいろかさらトといろたのまん(後撰)戀五)女心の心ありぬ

べきをき、て(同)下

「君とこれいもせの山も秋くれればいろかさりぬるものあぞ有

ける(新古)五)光俊

「いりさまお人我中をいひうとめさくとも君よ心かさるを(土佐日

記)「ちよへたる松よあれど古の聲のさむさひりらざりけり(拾遺愚草)上

「人

忘れぬ人の心のりねとよかさればりる此世ありけり(玉葉)春下)「さくら花を

射恒

「さくら花を

射恒

射恒

りてかざ、んくろ髪のりもれるいろも見えまがふべく(新古)賀之「とてとよお
ひそふ竹のよ、をへてりさらぬいろをされとりん(榮わか枝)四 關白殿の大饗に
ことありたるべきよあらねど御ひきで物のそどりたる云々 南おもてのそのこよ
こそいれおれへけれをさやうの事こそりたるべき(源 夕顔)四とゞりくおまへま
りもり侍りなんことを(同)八またいさ、りかそりたる所か(同 葵)五やうく
かそり給ふ事どものあれバ(万)廿六ながくひさしき萬代よかそらあらんいでま
一の宮(源 夕顔)十今一りさぬつよくなほともりもらばうちとけぬべくとえい
さまあるを(古)八下よミ「春霞さなびくやまのさくら花うつろんとや色のり
めく(源 葵)初 世の中かそりて後 桐つばの御門(續拾)戀二「偽とか経てんをらぬこ
とのをりもらんまでのとこそせめ(續拾)左大臣「山ふりく心のうちお契り
てもりもらでとつる秋のよの月(拾遺)戀五よミ「心をまつらきものぞといひ置て
りもらトと思ふりぞ戀しき

補 かそさき 此うささべん(万)四十七、月と、バ時もかそさき云々
不變ノ意也

補 かそく(狭)下、木丁ともれくよりとりいで、かそくをよくとたてとたて
かそをち 川遠(夫)卅(新六)五 光俊「りをちのまふのこやのかり枕夢よあして

も人よりさるな

かそをさ 川長(夫)十三爲家「さうへる早も袖のかけかれバ月よかれさる宇治の川長

(石清水哥合十壹番) 顯氏「とかせ舟ゆき、いそぎ霞めども聲へへさてぬよどの

川をさ補玉葉(秋下土御門 内大臣) 朝平らけまきのをやまの霧こめてうちの川長舟よまふ
なり

かそわと (夫)十七西行「かそとよおのくつくるふしををひとつよくさるあさで

そり哉補山家(上)「川とこのよどとよとまるなぐれ木のうき橋とさは五月雨の頃

かそりり コレホド又ユレバカリ (源 帚木) 八りわりり我よまごふ心から思ひこ
りなんと思ひ給へて(同) うつせミ 八りわりりのがる、心あめれを(同) てからひ 三

かそりりの天の下のげんざのれそいますまのえりくれ奉らト名のり給へくと云々
(續古) 戀五 俊成「もろここの人までとやくさづねをやりもりつらき中ハありやと(源

夕顔) 廿 けよりをりりよてへたてあらんも事のさまさひさり(夫) 十四 匡房「りをり

りの匂ひもあらト死くの花うてこそ花のゐるトなりけれ(續後撰) 戀三 少將「かそりり

もいらあらん世の雲間よりまよひさるべき秋のよの月

かそりり 川鴈。いふにか (神紀) 下以川鴈爲持傾頭者

けり(源 稚が本)五 ちるくくと霞わたれる空よ云々 川をひ柳のおきふいさびく水か
けあどれろりならぬをかきき云々

かそづ 蛙 **(万)** 六、四 「おもねえせまさせる君をさそ川の河蝦きりせでかへつるり
も(拾玉)二 「心すむ水のうき草なびきつ、くそづあくなりぬでの夕暮(拾愚)上 「不

のりなるりれの、末のあらをさあかそづも春のくれうらむかり(古今序)水よそむ
かそづの聲を死けそ(夫)五爲顯 「もかかーや筒井の蛙をれそり外をもあらせあさ

き心(補) **(万)** 八 「わりと、みまへのりらけいそのうらにかそりりもとあくか
そづりも(同)十 かそづあくよりの、川の瀧の上のあーび花ぞつちよおくあゆめ

廣足 万葉なるかそづの今かどりなる事河蝦考を見てーるべ(伊勢物)よひことにか
そつのおまをさく田よ水こそまされ雨のふらねど(中務集)かへるのりれたるを

人におこせて「かれよけるかそづの聲を春とちてなとりありぬとおもむけるりか
補 **かそづ** 川津 **(万)** 七 さそ川のさよきうらになくちどり河津とふたつとすれり

ねつも 廣足云 こい蛙よあらは河ノ津と千鳥とありふさつとも忘れりさきまを云
り(同)十 天の河津まの河津、おもねぬなごもありいづれも川の津の事也
かそつるみ (太秦牛祭祀)鐘樓法華堂 乃加波津留美 (宇治拾)一七 一生不犯あるをえ

らひて講を行れけるよある僧禮盤よのりて云々 かな、きさる聲よてりもつる
といり候べきといひたるよ補 (宇治拾)の文、云々もつるといくつをりり

てさふらひしぞと問たるよ云々とあ。御杖北邊隨筆四ノ十八説は厨ツルミの意といへり
かそつら 川面 (源 松風)六 これ川づらよえもいとぬ松りげよ何のいさむりもなく

たてたるしん殿の事をぎたるさまも
かそね 尸。死セル人の (神代紀)三 擧戸致天(推古紀)六 見屍骨(既空) (拾遺) 哀 忠蓮南

山の房の繪よ死人を法師の見侍りてなきたるりさをりさるを見て源相方 一契
りあれそりもねかれともあひぬるをわれを誰りとそんとそらん(源 葵)七 いと

そりなき御りもねそりりせ御かこりよて曉ふりくくへり給ふ(同 寄生) 六十 昔わ
りれをりなきしてりねをつ、そてあまの年くびよりけて侍りける人も(狭)四

五 十 「きえそて、りもねのひよなりぬとも戀のけふりひさちももなれト(散木)
中ノりもねしをきてよめる「むり人いりなるりもねさらされて此島よも各

をのこけん(元真)五 廿 (夫)忘れさる人よいひやる網代めく宇治の川波なぐれても
ひをのりもねをせんとぞ思ふ返り「世よへもくらけの骨見もーなん網代の

不ねへこまりさもかー

かまね 姓氏 (神代紀) 下 十二 宜以所顯神名爲姓氏 (天武紀) 卅七 十三年冬十月巳卯詔曰更改諸氏之族姓作八色之姓以混天下万姓一日真人二日朝臣三日宿彌四日忌寸五日道師六日臣七日連八日稻置

かまねぐさ (和名) 廿四 女青 一名雀瓢 和名加波彌久佐 子似瓢形故以名之

かまねぐさ (和名) 十七 水苔 一名河苔 和名加波奈 (式) 八ノ 鎮火祭水神匏川菜垣山姫

四種物 乎 生給 氏 (古) 物名深 養父 「ぬも玉の夢は何りのかぐさまんうつ、あたにもありぬこ、ろを

かまね 川波 (夫) 廿四 家長 「せきそめうちの川をみたちりへり田鶴の齡も君ぞつとへん (新後拾) 雜秋土御 門院御製 「たつた山もちやまれおかりぬらんりもかまね白き冬のよ

の月 (月清) 下 「やいた山よあらいのあき吹バクもなましろき淀のあけ卒の

かまね 瓦 (和名) 七 瓦 和名加波良 燒泥爲之蓋屋宇上 (玉葉) 雜二 後京極 「山りげや軒

もの苔の志とくちてかまねのうへお松風ぞふく

かまね 河原 (源) 夕顔 卅八 かまねのほど御さきの火もほのあなるよ鴨のうら也 (方) 廿三

「まつち山夕てえ行ていず崎のそみた川原おひとりりもねん 紀州あり といへり

かまね 横笛 (抄) (細流) 乳ノ出ザルナリ 雅望考ルニ物ノカワキタルチイフ

ニヤ〇又案ルニサワラカト類語ニテサツパリノ心ニヤ (源) 横笛 十 御乳いとかまねらりあるを心をやそてかぐさめ給ふ (うつろ 櫻の上) 卅八 今もるかりびはよーくしくかまねらりある顔つきして髪をそまきそりりあて (とりかへもや) 色白くかいらいと青やりあかまねらりあて (源) わうな) 上 七 尼姿いとかまねらりあてあてあるさまして (同) やとりき) 九十 ねめつるさうぞくけいにとりまねらりにて (紫日記) らうたけなるけもひ物清くかまねらりよ人の娘と覺ゆるさまいたま (宇治大納言物語) 四十 まりりの女のさそがよかいらりあるさまして (源) 帯木) 七 やすらかお身をもてかふるまひさるいとかまねらりありや (かけろふ日記) 二 我またまどめよりもことゝいろう ハ脱 あらむたかまねらりよかう打もりて脇足の上におきてやがておろりりて佛をねんと奉る (大鏡) 六 おとさまあるべきをそいとかいらかまねらりおおひせし事病付ても顔いいるべりりけれとかんえいとてぞ民部卿殿ハ常おの給ふおれ

かまねらよもぎ (和名抄) 廿 菊 本草注云 菊有白菊紫菊黃菊 和名加波良與毛木 一云

可波良於波岐 日精草也 (同) 十 白蒿 一名藜藜蒿 和名之路與毛木 一云加波良與毛木

かまねらかせ 河原風 (うつろ 俊蔭)

かそらのまど 瓦の窓 (抄) 山居幽栖ノトモガラ也 (千載) 序クつハ道をたやさゞらん

ガさめふりいらのまど柴のいりのことのもをもてるよ云々

補 かそらのまつ (散木) 屏風の繪あれたる家のむね草や木をどおひけりた

る下家あるトとれざいき人のれいたるかさかける所「我宿のかそらの松の木高

さふ身のふりよけるをこそれもへ (新後拾) 秋下宗 尊親王「古郷のりき

づきてかそらの松秋風ぞふく (續古) 戀四 俊成「ふりあけるかそらの上の松のねのふ

りくいり人をこのまん (玉葉) 雜三 後京極「山陰やのさの苔のたくちてかそら

のうへ松風ぞふく (枕) 四宰相の君のかそらの松ありつやといらへりつる云々

(白氏文集) 樂府牆有衣瓦有松 (平家物) 秋の草門をとづかそら松おひかき

つたけれり (三才圖繪) 志のおぐさの瓦松をかそらの松にあて、新後拾の故郷の

云々 瓦の松秋風ぞふくの哥を引は誤也かそらの松まの松也瓦松の字よ

よりて志のお草のこと、するひひぐこと也

かそらや 瓦屋 (後拾) 戀二 實方「忘れはよ又忘れまよかはらやの志た、くけふり志たむ

せびつ、(同) 戀四 長能「わが心かそらんものりかはらやの下さくけふりわさりへりつ

、(夫) 卅 家隆「かそらやの志さ、く人もこひわびぬさらハ淺間のけふりともあい

補 (新古) 戀四 定家「むせぶともそらトかこ、ろかそらやハ我のまけたぬ下のけふりハ

(續後撰) 戀二 基良「これをりりおもひこがれぬかそらやのけふりもあずぞハむせぶ

かる

かそらけ (源 若紫) 廿ひとり御かそらけ賜りて (同) やとりき 卅 五つきハの御かそ

らけ二たび三さび参り給ふ (後拾) 上 春云々 梅がえといふ哥をうたひてあそびけるよ

内よりかそらけ出まとてよし侍りける 補 (宇治拾) 三くろさかそらけのおすきある

をさりづきよしてかそらけとりて (著聞) 十六 卅 八ふろくさりそらけ持てまりたりけ

るよ

補 かそらけつくり (榮 布引の籠) 何のくはからぬハもべとハまりつりまつ

りけるものとものをきまとひたるさまことりよいみどりそらけつくりをどいふ

ものさへととろいくとせりまりつりまつりて云々

かそらふち (和名抄) 廿六 菅菖 和名加波良布知 俗よいふサイカシ

かそらふき 瓦葺 (枕) 六 八官のつりさの所よとらせ給へり云々 (抄) 太政官 廳ノ

也 所 瓦おきまてさまことあり (夫) 卅 信實「とのへ見ればふるきまりさのかはらぶき

のそらぬ御代ままめぐるりか

かそらひ 瓦種 (新六) 三 (夫) 卅三 光俊 「ふとこゆる道よふせとる瓦ひのくつともそらト
うづもる、身ハ

かそらびと (うつろ 藏開) 此殿ハウハ人里人入ミたまててそちさて、

かそらまわり 瓦硯 (續千) 物名 けらまわり爲氏

かそむりひ 川向 (散木) 十六 云々 まこと面白りける中よもりむかひの山つら

いうかりけるが思ひ出られてよめる

かその石星とある (神功紀) 六 阿利那禮河返以之逆流及河石昇爲星辰

かそのそらま 皮の袴 (夫) 卅三 權僧 「ふる雪におち草とむる大りひの皮の袴ハ見る
もれそろ」

かそのおび 皮の帯 (後拾) 三 戀 男よわすられてさうぞくかどつ、みておくり侍ける

よかそのおびあむむびつけ侍ける 和泉 式部 (和名抄) 十二 革帶今案帶以其所附金玉石角

等爲名故有皇帶隱文帶馬腦帶 云々 之名帶是其惣名也

かそのえた 川の枝 (賴政集) 上 水上 「木末よもあらぬるせきにわりちやる川の枝ハ

も、とちいけり

かそれろい (夫) 十七家 集清輔 「ひさ木おふるあそのかそらの河れろいにたぐふ千鳥の聲

のさやけさ (夫) 十九喜多院入 道二品 「けさこれバ立田川原の川れろいさをふ紅葉を波ぞ
をりける (新六) 六衣笠 内大臣 「月けも清きかそらの川おろいよちりてひささのえたも
くもらは

かそれと 川 (夫) 十七衣笠 内大臣 「小夜中とよいふけぬら玉いまの川音をこて千鳥かく

也 (風雅) 兼 春中 「打渡す宇治のわさりの夜深きよ川音をみて月ぞりよめる (新拾) 冬

教實 「そやきせハこりもやらで冬の夜の川音高く月ぞふけゆく

かそく河伯 カハノ カミ 乾 カガ をかねていへ (和名抄) 二 河伯 一云 水伯河神也 和名加波乃加

美 (かげろふ日記) そらけらのもちのくよの守よて下るを長雨しける頃その下る日

それたりけれバ々の國よりそくといふ神あり 「わが國の神のまもりやそへりけん

りそらけり天つそらけを 返 「今ぞあるりそくとさけを君がさめあまてる神の

名よこそいあれ

かそぐち 川口 (源 藤のうらハ) 十 「あさき名をいひかぐしける川口ハいりもら

、關のあらがき かそわさ 川渡

補 かそくま (万) 廿九 川隈の八十くまおちせ 云々

かそや カハ 濱屋の類よて川 (夫) 卅 重之 「春の日ハ行もやられ蛙なくるのかそ

屋 邊の家をいふか (夫) 重之 「春の日ハ行もやられ蛙なくるのかそ

屋 邊の家をいふか (夫) 重之 「春の日ハ行もやられ蛙なくるのかそ

屋 邊の家をいふか (夫) 重之 「春の日ハ行もやられ蛙なくるのかそ

屋 邊の家をいふか (夫) 重之 「春の日ハ行もやられ蛙なくるのかそ

や馬駒とゞめつ、

かそや廁 (和名抄)^十 唐韵云園作溷廁也 和名加波夜 或謂之園言至穢處宜常修治

使潔清也 (古事記)^{中ノ} 朝曙入廁之時 かそや人 (延喜式) (齋宮式) 洗人二人 廁人二人

人よりそやうと

かそやあき川柳 (顯宗紀)^八 伊灘武斯廬笈斲比野雛擬 (和名抄)^廿 水揚 加波夜奈木

(万)^九 十五 「かそづなくむつこの川の川やあぎのねもころとせどありぬ君のも (夫

木)^{廿四} 家隆 「玉いまやれちくる鮎の川やあぎ下をうち、り秋風ぞふく

かそやいろ川社 川中よかりの社めく物つくりてみお月のはらへをすをいふな

上にもくはけ (夫)^九 俊成 「六月やみそぎもせり川やいろ袖よ玉ちるゆふ浪の

と (同)^九 匡房 「かそやいろ秋のあせぞと思へもや浪のちめゆふ風のせりき (同) 土

御門院 (ゆく螢秋かせふくとつけせともとそきをせりき川やいろりな (貫之)^{四十}

「ゆく水のうへよいせへるかそやいろ川波たらく何そおなるりな (補) (拾玉)^五 「か

そやいろ何そお心のせりりやかつし神のめぐみなるらん (壬二集) 中「かそや

いろそや衣の名のみして浪よわたるの玉ぞちりりふ

かそふね川舟 (夫)^{卅三} 仲正 「せよりけてさおとされぬ河舟の片思ひこそくるりり

けれ (同) 同般富門院大輔 「あふ事をひさしくよどの川舟おどりこそ綱のか、ら波もり

か (夫)^{十二} 慈鎮 「さとしむるとも田のいなもちのしどきりがくれゆくよどのかそ舟

(枕) 川舟の下りさま (夫)^{廿四} よら 「川舟のそやきつなでよ引をぎてみそてぬき

よのこる松原

かそふえ皮笛 (源紅梅)^九 かそ笛ふつ、りあなれたる聲して○新猿樂記早職事之皮

笛○イ本うそふえト有 (おもひのま、の日記) 諸卿をひそ、てそやうがうと

うたひてかそ笛ふくもあり

かそで (狭衣)^{卅一} 下かそこやう此物あけさせて (宇治拾) 三大太郎の段 (同)^廿 せたれの

ひまより見ればかそでかどあまた見ゆ (古事談)^五 戰場死亡ノ者片耳ヲ切り集メテ

乾テ皮古ニ合ニ入テ持テ上タリケルナ (吉御記) 承安四年九月廿六日今夜有夢又

自或人許送皮古一合納桑 (體源抄) 唐よりもろくの重寶をいれて奉られたり

けり皮子のと、よ (宇治拾)^三 かそこのいとたらく打つまれたるまへよ 云々 まこ

とよかそでおろり (職人盡歌合) 皮籠造、このかそこ人のあつらへ物よて候

かそころも皮 (夫)^{卅三} (万)^九 詠仙 「とこへ夏冬のけやかそ衣あふぎそなたを山

よそむ人 (同) (新六)^五 六帖 題爲家 「山ふりく行ふそちのりそ衣よものりせきもきてあ

れあけり(同) 内同衣笠 「わさ角をかたきりけたる皮衣けふれとあれをまちわさりけり

かそでむしろ 皮子 (宇治拾)三、皮子筵とこひて皮よりさねてまきて幕引まひてゐぬ

補 かそでうま(宇治拾) 七ノ 七ノそたで馬かそで馬なときつきたり

かそあら川 夫 十九 「日くるれば山けくさる川あらうきねをさむもぞ鳴なる

かそ何河 夫 廿一家 「川何ひれまきのそを山いいたて、柚人いりまをさくくるらん

かそさくら源 野分 四 春のあけ卒の、霞の間より面白きかそ櫻のさきとたれと

るを見る心ちそ(細流) ウス紅櫻ノ花ナルベシ古今ニイヘルカニハ櫻ノ一也(河海)

朱櫻和名 「浅みどりのべの霞のつ、めどもこがれて匂ふかそさくら(新六) 六行
家「ひもりきりうへむらさきのかそさくら花のゆりりのいろもなつりコレモ朱櫻ト聞ユ(契云) 案 河海ニ朱櫻ナカバ櫻トシ玉フヲ誤リ也和名云本艸云櫻桃一名朱櫻 和名波々加一名 爾波佐久良 カクノ如シ又木具云玉篇云樺 戸化胡化二反加 今櫻皮

有之木皮名可以為炬者也此玉篇ニイヘル心ハ何ノ木トエラバズ木ノ皮ノ炬トス

ベキナスベテ樺トイフカ万葉第六赤人長哥云櫻皮纏マキツク作流舟仁真梶貫云々 ○和名ニ

今櫻皮有之トイヘル是也炬トスルノミナラズ万ノ器物ナドヲトヅルニ用ウル物也

猶委ハ本草綱目樺ノ下ニ見エタリかそ櫻トイフハ櫻ノ中ニ此櫻殊ニ其皮ヲ用ルニ

ヨケレバ名ヅクルカ○又カバ色トテ一種ノ染色ノ名ナレバ本ノ色ニ付テ名ヅクル

カ○河海ニヒカレタル哥ハ菅家万葉集ニ出テ拾遺ニノセラレタル共ニ落句ハ花櫻

カナトアレバカバ櫻哉トヒカレタルハ誤リナレド物語ノコ、ニヒケルヤウカバ櫻

トハ色ニ付テ名付テ則花櫻ノトミエタリ花櫻ハ紅ナレバカバ色カヨフベシ宣長

云和名抄ニ朱櫻迹波佐久良トアルハ加ノ字落タルニテカニバ櫻也カバザクラトイフハ此仁文字ナハブキタル也拾遺ニイヘルトドモナ考ベシ○かそ櫻を花櫻のこととみたるいり(源) 幻 八不かの花ハ一重ちりて八重さく花櫻さりり過てかそさくらハひらけ藤ハれくれていろつきあと、有て花櫻とかそ櫻をあらべてあけたりさらハ黄がちある花のさくをいへば六帖あもかまもさくら花さくらとからべあけさり **補** 徹書記物語にかそさくら也といへる説いり

かそぎり 川 壬生二品 中 「秋けさもちをながるさつたがも川霧もらへ山おろ

一の風(千載)定頼「朝平らけ宇治の川ぎりたえ〜」はあらそれわさるせ、の何ト
ろぎ

かそきぬ皮(枕)三ノむづりけある物うらまたつりぬかそぎぬのぬひめ(源初音)

三たいでの何ざりの君の御あつりひ侍るとときぬども、えぬひ侍らでなんかそ

ぎぬをさへとられお後さむく侍と聞え給ふ(多武峯少將物語)夏かれど山へさむ

いといふかれバ此かそ衣ぞ風いふせり(和名抄)十八説文云裘和名加波古路毛

俗云加波岐沼 皮衣也

かそぎ川(夫)廿八「つなでひく竹の下道霧こめて舟ちおまよふよどの川ぎ

かそゆ一。或人遊仙窟可愛語中ノ聲トある可愛ノ字ニヤトイヘド假字タガヘレバ

シカニハアラジ(撰集抄)三物よくるふとて見る同朋も何り又りそゆいとて見ぬ人

も侍りけるとりや(同)二法勝寺の邊よ寒くかそゆけなる乞食よき物くれて我身い

ゝあそせなる物さりりきてりへりよけり(發心集)廿七まぢりく見ん事もりそゆき

様なれば(今物語)よいあき御使をしてかそゆき事を見つるよ(盛衰)廿三眼前お細

つくる事いりそゆくや思されけん(同)六首をそね奉るときさをがよりそゆくや

思ひけん(つれ)廿八年老たる法師の小わらいの肩おさへて聞えぬ事ともいひ

つ、よろめきたるいとろそゆ

かそえづ水(六帖)八みよ一の、大川水のゆをびりよあらぬものゆを波のたつらん

かそいま川(夫)廿七「川島のまさでおたてるをら鶴の霜のつをさにといふりぬ

らん

かそと川(土佐)かおはの津よつきて川とりよいる云々けふ川とりよ舟いり

たちて(大和)百四十亭子のまのと川とりよおそいまにけり

かそいら蚊(拾愚)上「草ふりきまづらふせやの蚊をいらよいとふ煙をさてそふ

るのな

かそもり川(夫)十花園左大「七夕の天のかそ守心あらばかへさこたをかりさ、ぎ

のそ

かそせ川(後拾)言經信母「あけぬるり川瀬の霧のたえ〜」お遠方人の袖のよめる

ら(後拾)雜三圓明ぬなり加茂の川せよちどりかくけふもそのかく、れんとをらん

後拾(夏)雜「なこむてふ神のゑるもみたら一の川のせきよき夏をらへりも(万)十九

おちたぎつががるさきたの河のせよあめこさそり(石清水哥合)五番「明わたる

川せの波ふたはけふりやがてもふかく霞をらりか(拾)秋「秋風よ夜のふけぬけ

も天の川かえせよ波のたちるこそまて

かえせうえう川道(古)上秋九つ日うへのをのことも加茂の川原よかえせうえう

いけるともよまのりてよめる

かえせ交(源)葵十かゝるかりらひの情かえせべき物ともれずいさらぬぞ(榮御着裳)

九かさけぞかえりめでたうりひある御をのらひなき(源若紫)四十女の心かえり

る事とおしそりられぬべくよの常かり(同玉うつら)三猶とへぬるとちこそ心

りもしてむつびよりりけれとの給へ(同)二さる心をりもせるおや、有りけん

(同)こてふ)十二かのこより外に又ことのをりもせべき人こそ世お覚えね(同玉

うつら)九おあト心よいきなりをりもせべきこと(同)きりつは)十もねをあらべ枝

をかえさんとちぎらせ給ひ(夫)十師光「あまのぐえたえぬ契りのこたりとやそ

ねをりもせる鶺鴒のそ(夫)廿五西行「清見湯沖のいそこを忘らなまお光をりもせ

秋のよの月(源夕顔)四打ふたをつるさほうちりも給へり(夫)我くれなるの御

ぞのきられさりつるやと(千載)戀四「わびつ、いかれたお君が床なれよりもさぬ

よものまくらなりとも(源桐壺)廿辨もいとざえり(一)こきせりせめていひりも

ることゝもなん興ありける(伊勢物)五常に見りもしてよまひわたりけ(源わ

うき)上七紫ト明石トたい比上へまをならねど見えかえり給ひて(同)帯木)四やど

くよつけてかきりも一つ、も見侍りなん(同)さつき)卅常よりきかえり給へば

わが御手よいとよく似て(万)十七四月た、バときもりもさ(云々)源よほふまや)

二わりきどち思ひりも給つへき人のさまよかん(同)そま)卅哀れある文(詩也)をつ

くりかえり(道濟集)三川入道(云々)まうとめのもとおありて又下るよあそれある歌

よまかえりとりけるをりき置たり(草紙を見て)同紅葉賀(廿)一つ、むめる名やを

り出んひきりもりくるころふる中の衣に(源)わかかな)下ノ五わたにさころ思ひ

りも聞えさせ給ひためれ(源)玉かつら)九かたよやどる所もとひりもして

(同)同)廿あ、よれもよませと尋りもしていひたれば(同)稚うもと)七ねあト心よか

ぐさめかえりてをて給ふ(いせ物)廿三れとあにかりよければ男も女ももぢりも

して有りけれど(源)玉かつら)廿まづいひやるべき方かくさきりも(同)こつね)三

けさ此人々のさもふれりも一つるいとら山う見えつるを(源)帯木)廿かまめさ

りもよ

か蟹和名抄)和名加仁 八足虫也(云々)蟛蜞稻春蟹之類也(云々)蟛蜞葦原蟹形似蟹

而小也、云々石蟹 和名以之加仁 生海際石下故以名之

かよ小兒（うつろ 藏開）上、一、りよといふ物ゆめをりりつき給もぬこそあけれ

がよ俗語の（ヤツニ）古今大哥所「まきもくのあかしの山の山びと、人もみるがよ山

りつらせよ（方）十、^廿「うれたきやあこやと、ぎを今こそい聲のりるがよきかきとよ

まめ（家持）四（方）十（夫木）雪さむさきも開けぬ梅花よ此頃さて（方）のちりもあるがよね（方）

（古今）（六帖）四「かくかきた雨とふらん涙川水まさりかきりへりくるがよ（躬

恒）^卅下「老ぬれをりいらの白く卯花を折てりざさん身もまがふがよ（元真）四「不

と、ぎを去年の初聲りりざり一人のさくがにまづもかりかん（曾丹）「をこかれと

親のつけてし名よしれも猶よしたと人も見るがよ（方）^卅四「我やどのゆふりけ

草のちら露のけぬがあもとあおもゆるりも補此詞ハ萩原廣道がてよをは系辭辨

に例を多く擧ていへるが如し（玉葉）一花山院前内大臣「春霞かきたちりくせりへる山こ

えゆくりりのちちまどふりよ（玉緒線分）爾卷卅又波ノ卷六丁論あり見合をべし

かよカモン也（合義解）^十、^{十三}内掃部司正一人掌供御牀狹疊席薦簾苔鋪設及蒲藺葦等

事（古語拾遺）^六天祖彦火尊娉海神之女豊玉姬命生彦瀲尊誕育之日海濱立室于

時掃守連遠祖天忍人命供奉陪侍作帚掃蟹仍掌鋪設遂以爲職號曰蟹守今俗謂之

掃守者彼詞之轉也（建武行事）「かよりの女孀ともささぐくいとぎと、のへた

る かよかよ（古）（貫之）九「人のいさ心もちらぬふるさとは花をむりしの香よ匂ひ

ける 補かよのめ（源大府宗行集）うちよて大夫のまけのちふぎのかのめりためてとくつ

りいそとて「かよのめれもある、たびにいとゞく君がて、ろのうろめたさよ

か顔（和泉式部集）上「何のさめられる我身といひがややくとももの、あけりい

き哉（源末つむ）五「まらうどのこんと侍りつるいとひ顔よもこそ（源あさがや）十

とひ聞え顔からんもいりつとて（伊勢物）^段三「せんざいの中よりくれるてかうちへ

いぬるりよよてこれバ（源わうな）上九「ひとりさち此世をかれ顔にもあらぬ物り

ら（夫）^二春（六帖）^二伊「鶯のかくねをまねお山彦を友あり顔にもとめつる哉（夫）

戀卅六 後京極「吹風も物や思ふととひ顔あ打をぐむれバ松の一聲（堀太）^登「雨風よあれ

のこまざる野寺にハ灯がやよ螢とびりふ（源すま）^三十女君のこき御ぞようつりてけ

まぬる、がよかれを（古今）^{戀五}「あひよあひてもの思ふ頃のこが袖よやどる月さ

へぬる、顔ある（夫）^{卅六}語西行「女郎花池のさ浪よ枝ひちて物思ふ袖はぬる、がよあ

る(源 葵)八冊をりり顔なる時雨打を、きて(夫)十五六百番慈鎮「山めぐる時雨の宿りそ

、そそらわがもの顔にいろのそゆらん(源)てならひ八廿かく顔からんもあや

くて(今物語)十かくて顔よりたりけれも(夫)十六喜多院入道二品のまこ「霜がれの荻のまき

やき霰ふりつけ顔よてぞ冬ひきよける(後拾)秋上中納言女王「人忘れ物をや思ふ秋萩の

ねころが不にて露ぞこぞる、(源)わら十九ふるめりき御身さまよてさちなら

び顔からんも(源)うきふ七ちかうよりて御ぞともぬぎなれ顔み打ふ給へ

れも(源)ゆき五人の御おとよかびき顔よてゆるしてんと覺す(源)のわき九うれ

へ顔なる庭の露さらしとて(夫)十四正治二年大藏卿長房「あそび野のまくぎが原の夕ぐれ

ようらとが不ある虫の聲し(源)推本をりしと思ひかぐらいとうけせりたるう

しろ見顔し打いらへきてえて(源)朝顔廿扇かともおとしてうちとけ顔をりしけあ

り(夫)十六定家「白菊のちらぬのこる色顔よ春の風をもうらとける哉(後拾)哀云々

内よも御覽せさせよと覺し顔し歌とつりきつけられりける中よ(源)とひひめ廿

れとろき顔よあらせかこやうよもてかしてやをらかくれぬるけもひとも(源)わ

かな上百これもれとらトと思ひ顔なる中よ(源)横笛十思ひ及び顔からんかさと

らいとけれと(源)帯木四まち顔からん夕ぐれかどのこを見所のあらめ(堀後)故郷忠房

「世とともあまさり顔かき身よあれも故郷人み見えまうきりか(夫)十九定家「冬の木

の霜もさまらぬ山風よ星の光りのまさり顔なる(堀太)柳「青柳の糸のどりの髪

かれや吹くる風のけづり顔なる(和泉式部集)上「あらにのみゆるものりを玉た

れのとすり顔のこれもかくるま(六百番)春十九右「春くればかびく柳の友顔に空よ

まがふや遊おいとゆふ(伊勢物)「夕されいとひひがさき我袖にやさる月さへぬ

る、が不ある(續後撰)秋下成實「よをりさね身にいとまさる秋風を恨顔よも衣打哉(同)

中「おく霜のたたの大野の眞葛原恨顔なる松むしのこる(同)同「名よさて、秋の

かりばをこよひぞと思ふがほある月の影りか(同)春下よ一の川いとせうつろふ山吹

よ春の日敷をあらせ顔なる(同)十二戀「こひくしてゆふ夜の夢をうつ、ともあらそ

顔なる鐘の音哉(宗干)「うらむれどこふれと君がよと、もよあらせかほよてつれ

かりるらん(元眞)「春來ぬとまつらんが不よ鶯のまつらん顔よふり出つ、かく(長

明)「そる墨をもどきが不あもあらふりかかたりひかいと泪もやする(大伴家持)を

りてしもてめき顔よ梅の花咲り山へをわたるをら雲(躬恒)「うそくこき色いま

がへと花といへもひとつ顔よもこえわたるりか(和泉式部集)上「露をともうし

ろめさかき花のうへを思ひが不よありしつるりか(同)下「かがめつ、ことあり

ぐ不よくらしてもりから夢のみえをこそあらめ(源やせりき)五十さりとて心り
 せし顔よあへたらんもいとつ、ましく(源わうな)八さやうの筋よやとの思ひよ
 れどふと心得顔よも何ういらへ聞えさせん(夫)十四家「こよひへと心得顔よを
 む月の光もてあそ菊のちら露(源竹川)八心よせあり顔よもてあして(同さじらひ)
 六人々の心もき顔よいそぎ思ひこれと(夫)十三西行「つれなくて涙おとさぬ人もあ
 らト心見が不よせめる月りか(源まつかせ)六「そとあれし人へりへりてたどれ
 ども清水ぞ宿のあるト顔ある(夫)廿七土御門内大臣「苔の庭道ふとけし跡もあしぬふる
 さづのこあるト顔よて(狭)廿四中、人めまれよてとがむる人もなし雪もりあるト顔
 よてふりつとさる庭のおもえるトと心やそけかる城見わさし給ふ(夫)十六「風
 さむみそ浦邊をこぐ舟よ山の木の葉はさひが不ある(源をつくし)おとゞも
 り、る御けしき聞顔ありあらで(同夕きり)四十何うの聞顔よもとおぞいて(同わ
 うな)六下十音よのこ秋をきりぬが不あり(枕)七、耳か草とあんいふといふ者のあり
 けれもうべかりけりきりぬ顔あるのをと笑ふよ(狭)十四上、四文のわざとの使奉り給
 はんもきしろひ顔なるべけきを(源)かけるふ七けしきのいさ、りきさり顔あるを
(新六)六光俊「まさのとをさしとる事のありが不よた、くくひかの人れどろり(和

泉式部集)下「れともせで秋の過ゆくとしとにうさくもるともたらせり不あ
 り(源紅葉の賀)五空のけしきさへ見しり顔あるに(同常木)四十志ひて思ひたらぬ
 顔に見けつもいかに不とたらぬやうに覺をらん(同)廿七初「せめてたらせ顔あり
 へても(枕)六、いとにくけかる娘ども持とりともこそ見侍れかとの給ふ御けしき
 いとしと顔あり(源のり)五あかりままばいと志づめ顔にて(夫)十四永久二年
 「風にあへはをる、のべの草のそをもとき顔ある庭の菊りか(源きりつ)十四草
 むらの虫の聲、もよろ顔あるも(夫)廿六忠「あしとあふべにあらはれて聞ゆ
 ることをくるしひももて出顔あうつろひにけり(源てならひ)廿三あかぢにそを
 かき顔ある御ありさまに(同夕きり)七十かくせめてすまかれ顔つくり給ふ不と
(右京大夫集)廿三「まよひ入し戀ちくやし折にしもす、め顔ある法の聲りか(新六)
 六「夕日さす岡への松の下つ、トとき木が不よ花さりりあり(かほ)源のわき)廿
 見つる花の顔どもを思ひくらべまよしきて(拾遺)別よ三人「櫻を露よぬれさる
 顔これをかきてわりれし人ぞ戀しき(源)廿五五月の顔のこ守らせ給ふ(夫)八古寺
 「うつしける月の御影の光りあひて軒のあれまよつもる白雪(竹とり)十まづ紙を
 くさしてよ、の貝面見んと御ぐしもさけて印本御手をひろけ給へるよつむくら

廿「れまのつも、なびきさる浪に盪けの香乎禮流國爾。或云此乎の本の誤りならんと

(字鏡)五十 芬和也調也秀美加乎留(源うそぐも)七つらつきまよのかれるをどな

と(源さうき)廿口のうちくろとてゑと給へるをりうつくしき女よて見奉らま

をうきよらかり(源あけまき)人の御けむひ思ふやうにかをりをりけかり

(源かしの木)三やうをかれてりりをりき顔さまかり(源よこぶえ)十まりの

とちめをりうりなれるけいきかど(夫)「うをらぬ誰りあらま梅は花白月山

の雪のあけずの

かすぐそりカハレ(源あけまき)九十ねをのまきて日數へにけれハ顔がそりの

たるも見ぐるしくあらで(拾遺)八戀五よ「阿さまや見しりとたにも思もぬま

りもらぬ顔ぞ心からま

かすかたち(源あつまや)八ももら顔うたちのそぐれたらん女のねがひもか(同

あふふみや)十顔りさちもそそりといづこかんそぐれさる

補かすぐそか(散木)野徑「みちすがら枯野にたてるかすぐ花ふり分がとも霜れき

にけり。かほそなの注よ引合せ見るべし

かすよどり(夫)廿七千「むこ川に跡もとめぬかすよ鳥さく日もえぬ五月雨の

頃(万代)家「山川のるくひありよふりすよ鳥かつ見るとびあ音をのまぞさく

かほよ(白文)三、悦目即爲妹(万)十四「たこのねによせづかまへてよそれと

もあにくやいつのそのりすよまに

補かすよまか(万代)戀四「あづまぢのりすやぐぬまのかすよまか時ぞともかくせ

なぞこひしき

かすつき(源紅葉賀)十五ほざれ所かき御顔つきを(同をとめ)二十いたう酔れてをる

顔つきいとやせくあり(同かしの木)十生れ給ひぬ云々かく恐びたる事此あやあ

くにいちとるき顔つきよて(枕)二八いたとり云々虎の杖とりきたるとり杖なく

とも有りぬべき顔つきを

かすづくり体の(枕)三十七常は女のおのれをよろこぶもの、ためあかすづくりは士

のおのれをいれる人のさめにねといひたるといひあはせつ、申給ふ(源あけまき)

四十おのりト、此人也、我あしとやねれもへるうらでねら顔に額髪を

ひきかけつ、いろどりたる顔づくりをよくして打ふるまふめり

かすつま(夫)九知家「むすびれく青つゝらこのりす瓜のさぞかめからぶたぐひのま

して

補 かすぶる

撰集抄) けすぶるつきて とありつら杖のこと也

かすのにすひ

顔の(源)きりつ石 七つらつき顔の匂ひさまりへ給せん事をいけり

(同 紅葉賀) 五

かざりの紅葉いさうちりすぎて顔の匂ひにけされたる心ちすれを

かすのおらんりとさき

(狭) 廿三中 あさりくほしき迄光りかやくやうに見え給へを

さふらふ人々いいとこりかく顔のれりんりたさき心ちするに

かすのもと

(枕) 二ノ おくねふさしと思ひてふしたるに蚊の音を聲は名のりて顔

のもとにとびりりく

云々(同) 四ノ 三尺の木丁をたてたるは帽かうの志もいたを

こしをあるとまたてる人内におたる人と物いふ顔のもとにいとよく、あたりたる

こそぞりいけれ

補 かすくらべ

(仲文)「あがすとけりすくらべせよでくらくのれもてれてこしをわれ

のこぞせん

かはやう

(狭) 四ノ下 御いらへもなくたゞ打ふさせ給へるよこがれりりたる

御ぐいのりり顔やうなといとらうたけさまさらせ給へるも(とりうへせや)

三ノ

十六

かすさま(源) 末つむ 六 けお此皮なうての寒うらましと見ゆる御顔さまをる城(同

うーはぎ) 三 十 やうをかかれてりをりき顔さまなり

かすさま(宇治拾) 五ノ 此集りたる人々心ちよげお顔さまありめりひて

かすたらぬ(枕) 六ノ

初瀬ごも 又よるかどの顔かど知らで人々しき人の行ひた

るが 云々 顔たらぬ誰からんといとゆるし知りさるはさかめりど見るもをり

かへ替 カフ

壁(和名) 十一 室之屏蔽也 和名加閉 (風雅) 秋中 「よそのむしをかきとまりぬる

雨のよのりべにれとするきりしきりか(同) 同 公蔭 「きりしきりすれのがかくぬもた

えくりにりべのひまもる月ぞりか(新拾) 秋 (月詣) 九 兵衛 「きりしきりすれのがかくぬもた

りにぞ聲のそるよもぎがそま風やさむけれ(月詣) 同 覺延 「秋ふりきりべの

なりなるきりしきりすいつまでくさのねをやかくらん(禮月令) 季夏之月蟋蟀居壁こ

れよりして壁の中をる蚤とよめるなり(職人盡歌合) ひるよもたらぬおまりべの

かべ 夢の事も多く壁をうねて (後撰) 戀 源れりけが通ひ侍りけるを後く(いまの

らむかり侍りにけれも隣の壁の穴よりおすきをまつりお見てつりいける 駿河「

まどろまぬりべも人を見つるりなまさしりらん春の夜の夢(同) 哀 めの身まり

りて後を侍りける所のりべにりの侍りける時りきつけて侍りける手を見侍りて

兼「ねぬ夢にむりゝのりべを見てゝよりうつゝは物ぞりかゝりける(兼輔)一もやうかくかりにける人にもろともに逍遙せし所をひさしくかきて見て「うたゝねのうつゝに物のりかゝりきむりゝのりべを見ればかりけり(赤染)入道殿おそゝまさて後御堂まうでたりゝにいとさびしく池のうき草をけりゝ一「いよゝへのりべにざにこそありときけ池よりつれるりけも見えかん(頼政)岡崎三位入道のもとま壁に瀧のりよりきて瀧の下よりまことの水をれとゝつぎたり遠くて見ればたゞれな下水の落さるやうま見えゝを見てりへりてつりけり「うつゝまもりべにもれか下瀧を見てねてもさめてもこそられぬりか返り「夢の世にりべより落る瀧の糸を君が心にけりやさま(金葉)人しらす「経ぬる夜のかべさわぐく見えゝりどわりちりふればことなりけり(夫)九順徳院御製「かべま生るいつまで草のきりゝす秋待たすの露やゝのもん(草庵集)俳諧「ぬる時まゝる物とてやぬを玉のめをもかべといひもどめけん(散木)不見書戀「年をへてとかりのりべはくづせども夢まもふと見えぬぞりかゝり(同)うれゝさハ夢をりたにかけまどもりべまむりひてとゝをふるりか(新續古)雜下「か、けても光やそふとまどろまぬりべまぞ見つる窓のともゝ火

かへ柏 (方)十九長歌「松柏のさくらえいまさぬ(和名抄)廿九柏兼名苑云柏一名掬和名加閉

かへ榎 俗ニハカヤ

かべいどう加倍 (隆信集)四位して後臨時祭のかべいどうにてまゐりたりゝ(同)

又の春臨時祭のりべいどうよ

かへどの(細流)栢梁殿朱雀院ニアリ (河海)皇后御在所也(源)わうか (上ノ)御志つら

ひのかへどの、西おもてに

かへり文の返 (源)さりつば十御りへり御覽せれば(同)若紫廿同僧都の御りへりも

おをトさまおれを

かへり何 一返二返 (源)わかむらさき四十 哥云々とふたりへりうたひたるに(千載)序

みそちあまり三りへりの春秋よかんかりにけるかへりカヘルの

かへりわづらふ(新六)「ひりきへてゆきつもりぬるあま雲のりへりわづらふささ

たれのそら(拾玉)四「卯の花を出し山路の雪ととてりへりわづらふ鶯の聲(夫)

十三秋「ををこひてりへりわづらふ燕りかかれさへ秋の風やりかゝり

雜隆季「ををこひてりへりわづらふ燕りかかれさへ秋の風やりかゝり

かへりりくれよ(加茂社哥合)十二番「風ふりまらへりりくれよ櫻をなさらぬまも

さぞ枝ふこもりゝ

よやうへりて見れどもありてこゝろつくさむ(同)十三「世のなりをうゝと思ひて家出せしわれやなまゝ、うりへりてならん(千)秋上二品親王「秋の野の千草の色ようつろへば花ぞりへりて露をそめける(拾愚)上「まさきより花を見て、行りりやうへりて春のとまりをさしる

かへりてい (かけろふ日記)三 いみづくけうとくてもれそしける哉もし出給ひぬべくやと思ひてまうできつれどりへりて罪うべりめり(源)きりつや (二)卅りくありがさき人またいめんたるよろこびりへりていりあしるべき心をへをれもしくつくりたるふ

かへりてんどやう カヘリ (狭衣)卅一 來年をりりりへり殿上して五位の藏人よなりて

かへりあるト サキニ出セルカヘリダチノアルシト同シ ハテ、勝方ノ大將ノ里亭ニテアルシスルヲ賭弓ト同シ オスマヒノセチ (公事根源)賭 弓是ハ天子弓場殿にて弓を御覽せらる也云々 事さて、後大將射手に饗をさふ是をりへりあるトといふ也りへりあるト行ぬ大將ハ左右かく參内せぬ事よて度々の召につきて參るとりや(年中行事哥合)射 「あづさ弓いてのつりさをひきつれてりへりあるトをけいさきことある(後撰)秋 中 をまひのりへりあるトのくれつ方 (源)おやふみや

六のり弓のりへりあるトのまうけ六條院にていと心ことよし給ひて(かけろふ日記)中つとめていりへりあるトのちりくかりたれをつきどいひあしつ **兼盛** 大將の家よすまひのりへりあるトするよ

補 **かへりあそび** (榮)さまくのよろこび (まつりの日のりへりあそび御前よてあるよ)

補 **かへりさま** (源)蓬生 (一)りへりさまよ立より給ひて

補 **かへりきく** (著聞)六 仲正りへりき、て (同)十六 僧正りへりき、給ひて (同)九 十 不どへまうへりもぞきくとて (同)九 貞綱りへりき、て

かへり 願 フリカヘル (新六)六 光俊 「いれある花の盛りの心哉身もりへりみせ人まされけり(拾遺)別 君がむ宿の梢をゆく」とりくる、迄よりへり見しもや(源)まさきはら (二)廿 御車引出て打ちへり見るも(同)か (一)は木 (四)廿 身をりへり見るりさ

たましてまうくくらぬうらみをとめつる(万)廿 心 をい こ を思 ひ つ 、 り へ り 見 せ れ ど (源)帚木 (三)十 やがてあまよかりぬりし思ひたつ不どいいと心すえるやうにて世よりへりますべくも思へら(同)か (一)は木 (世の中をりへりみまどう思ひ

侍りりくど(同)タ ガ ヤ (卅)九 り へ り ま の と せ ら れ て む ね も つ と ふ さ が り て 出 給 ふ (同)蓬生 (六)十 り へ り ま の と せ ら れ け り (玉葉)旅 「あつまの、けふりのたてる所みてりへ

りみせれば月りたふきぬ(源 帚木)四十りへりまがちまて出給ひぬ(万)廿二「ひん

りーの野よりきろひの立とえてりへりませれば月りたふきぬ(万)廿九よろづた

びりへりみーつ、(同)廿八長哥「いでむらひりへりませれて(同)廿五「と、こりりりへ

りまーつ、(同)廿八「けふよりりりへりまかくてれなきまこれ(後拾)法師旅増基「と

やこれまりへり見られて東路を駒代こ、ろままりせてぞゆく

かへり恩願ノ心ニテ(落く)四わが子七人あれどかくこまりま心まらひりへりま

ひある(枕)九ノ。關白后の詞ま、らめでまき人をなへすゑて御覽せることいとらや

ましけれ云々これ家々此娘ぞりーあせれなりよくりへりまてこそさふらひせ給え

め(榮 見さてぬ夢)三めでまきまは佛おもつりうまつらせ給ひて僧をもりへりま

させ給ひて歸らせ給ひぬ(後撰)三法皇りへりま給ひけるを後々ひ時れとろへり

ーやうおもあらはかりまけれ(うつ)祭の使三侍從此あそんにれぞーかぢらへ

てりれをもりへりま給へ(同)菊の宴下ノ。季房宮アコ君ニア廿五。テ宮ノコタノム所ニ

たよりへり見給まがくーをまつりうまつら文もいとよくならひー奉りてん

(源 さま)七此殿の藏人まあーりへりま給ひー人かれ(うつ)國讓中ノこれ打す

て、なくまるとも右のれとまの物ー給へまりへりみ思ひてん体れ竹とり四親ま

ちのりへりまをいさ、らまにつりうまつらでまらん道もやすくもあるまトきま

云々(源をとめ)二身まあまるまで御りへりまを給ひりて此君のまとくま忽ま身を

りへまるとれもへまましてめくまきひからぶべき人まき御覺えぞあらんりー

かへる解(和名)一十八ノ羽族類卵野王按解俗云加倍流卵化也(大和物)「まき人

のまもりあまもかるべきま今ひとりへるけふ此りあーま(うつ)たつれ村鳥七

「いとふめるまづのかひこ今宵よりりへるーや千代をますらん(同)藤原の君七

ま千鳥ふまこー浦ままもりこのりへらぬあといたづねまさん(夫)七(新六)二信

臣「魚の子のりへるまもある物をさらぬ別れの跡ぞりあーま(玉葉)賀「神の

ます山田の原の鶴の子りりへるよりこそちよひりぞへめ(清輔集)「月詣」鳥の

子のありーあもあらぬふるまひりへるあつけてねをやなくなん(玉葉)雞のりひ

このいほさりへらぬまどま(今物語)「鳥の子のたまそのかりまこもりあてりへら

ん時りとまざらめや

かへる弓(千載)雜上大宮やとせまで手ならたりー梓弓りへをまるとるまねぞかり

れける(堀太)後朝戀「まぐさむる方こそかけれ梓弓歸るまどまきけさのりあーま

かへる歸(万)三「風をいたま沖つゑら波たり、らーあまのつり舟濱よりへりぬ(後

拾別相「いとそしき我命さへゆく人のりへらんまでをしくかりぬる拾遺別

「さうれゆくけふいまとひぬあふ坂のりへりこん日の名にこそ有けれ古別今こ

れよりりへりねとさねがいひけるをりに同りへりがてよして別をいみける同

下春「よそよそてりへらん人あ藤の花をひまついれよ枝はをるとも万三ノりへる

べきときよはかりて源きりつば二甘く有りがさき人は對めんいたるよろこびり

へりてりりかゝりるべき心をへおもしらくつくりさる同タがほ二四十あらぬ世

よりへりさるやうよそよそいお不え給ふ同タがほ二四十くるればりへらせ給ふを

源てならひ一四十此めづらしき男のえんたちちる給へる方よりへりいよけり伊勢物

段一いづこをさりりとも覺えざりければりへり入りて同段二りへり来ていりお

もひけん源桐つば八御使もいとあへかくて歸り参るぬ同玉かつら六もどの國

一歸りちりぬ後拾一雜村上の御時上よのりりて侍りけるよ上御とのこもりけれ

さりへりおりて齋宮女御古今別山ふのりりりへりまうできて後拾別能因法師い

よの國よりのりりて又りへり下りけるよ云々後拾春上加賀「ちるまでいよびね

をせかん木のもとりへらば花のかたてあるべし風雅秋下「風わたるま葛が原

一秋くれてりへらぬものりりり冷かりけり後戀五「常よりもまとふくぞりへり

つるあふもちもあきやどり行つ、新勅戀四夕やまの道さどくく月待てりへれ我

せころのまよももん補体の語万六ノ關をくばりへりまたにも打めきき妹が手

まくらまきてねまゝを同二長歌近くらばりへりまたよも打めきて

かへる物のうちが狭衣三中、萩の葉の露のいたうまたれてをれりへりたるを吹

こすこがらしあそらくくととされたつる露の白玉云々「をれりへりたきふいわぶ

る下萩の末こす風を人のとへり新續古秋下「うらがる、のそらの眞葛吹風より

へるを見てや秋もゆくらん新古雜下赤染「うつろもてまばしおのたの森をよ

かへりもぞさる葛のうら風後戀三「今ひとて引かへりぬるこゑからば追風よても

きこえまゝやと

かへる色のかへる也。下染とする物なれば本の色よかへる拾遺戀五よと「限りか

く思ひそめてしくれあゐの人をゆくよぞりへらざりける新古旅西行「思ひおく人

の心よあたいれて露わくる袖のりへりぬるりか狭四中「くれなるの御ぞどもの

よべの雪よ所々かへりいづとさへこと更おかくてこそきめとなまめりく先

でこ拾玉四五「いりよして同とどりのりへるらん松よ露のおりぬもれり

戀三衣笠内大臣「月草の花よの帯よとけ初ぬりへらぬいろをされよとそま後撰

四戀 こそれ侍りあける女よつりいける「菊のそなうつる心をおく霜ありへりぬ
べくもれもゆる哉返一「今いとてうつりもてよ一菊の花うへる色をはされり見
るべき神祇（新古）「小一山神のそる一をまつ此葉よちぎり一色ありへるもの
り春下崇（風雅）「年ふれどりへらぬ色ハ春とよ花よそめて一心なりけり（隆信
集）「たよろつろふ花れ色なれどそめ一心ハかへらざりたり

「かへる夫廿三光俊「かよ山れ松風をやく春さて波よぞりへる池の氷ハ是モ前後の力
ハルと同く本
の物なる心を
いふなるべし

「かへる年かへる枕五りへる年のささら廿五日云々（夫）廿後徳大寺
左大臣御
集春のくれ
の御歌中 「うへる春ひまの駒とめあふ坂の關の清水に一そ一水りへ（千載）冬
相摸

「あされふもくれぬくど一のひあざりなりへらんことハ夜のまどれもふ散木廿
（金葉）三月晦日の心を「かへる春卯月のいとよさ一こめてあそ一とあれのそど迄
も見ん（夫）十五
經家「歸る秋とたのそらよりゆくならバ舟がくれせよ沖津をらそみ（拾

玉）六「くれぬれバわがみよとまると一をなとりへると人のいひもとめけん
「かへる。宣長云ワキカヘリ死カヘリなどいふ類皆其事の至りて甚きをいふ詞（元眞）
也今世の語もニエカヘルヒエカヘルと多くいふと同ことなるをや

四廿「君こひて露の命のさえりへる露をたよかどまよせかりぬる（古）戀「わが宿の

菊れりき根におく霜のさえりへりてぞ戀一りりける（源）こ一ひめ廿こりき人々の
樓の上「そ

なたらりよ物聞ゆべきもなくさえりへりか、やり一けなるも（うつろ）源「そ
よりへり思ひを先一世の中のおりぬことこそあされかりけれ（狭衣）「そよのへ

りまつお命ぞたえぬべき中一何よとれめそめけん（源）顔「そよりへり思ふ心ハ
そり給へりや（同）葵廿御衣かともとけ一の香よ一みりへり給へり（元眞）一廿「心

をもちつりわりか一とおもふ哉いつの間よりハもえりへるらん（同）もふぎり三四十
「いづれとかわきてかりめんさえりへる露も草をのうへと見ぬ世を（古）長歌
貫之「ちそや

ふる神の 云々庭ももされよふる雪の猶さえりへりといとよ 云々
「かへる古 雜上「白雪のやへふり一けるかへる山かへるすいも老にけるのそ

（後撰）戀（友則）（六帖）「みるもかくめもなき海の磯よ出でかへるすいもうらまつる
哉（四條大納言）「つもるとも雪とともある年からバりへるすいも君あひられん（源

手習）四十 親と聞えけん人の御りさちも見奉らばさるるあづまをりへるすい
年月をゆきてよまかさかよ尋ねよりて 云々（能宣集）「すみの江比年ふる松のよハ

ひをほかへるすいも浪やかぞふる（殷富門院大輔集）「心よりいづるれもひのわり
はゆハかへるすいもよゆるりか一さ

かへる アマガ (蜻蛉日記) 中山 下山をのりの、ちへあまがへるといふ名をつけられたり
ければかくもれけり 云々 「おそこの神のたをけやかりけん契りしことをお
もへかへる ハヒキカ (今物語) 實 「法の橋の下にとりふるむきがへる今一あがり飛
所がらをや(枕)あまのつりてかへるかりけり

かへる (和名抄) 十九 蝦蟇唐韻云蛙 和名加 青蝦蟇 阿平加 黑蝦蟇 豆知加 蛙龜 阿末加 蟾
蜍 和名 (後撰) 四 「足引の山田のろろつうちとびてひとりとくへるの音をぞあきぬる
(中務集) 「それりかくからをわきていしのびけんよみりへるてふ名をやたれし
(藤原清輔集) 「ちりひりを思ひりへる此人をれむちりらもれを思ふころりか
(後撰) 四 田比をとりにかへるのをきけるをき、て(中務集)かへるのかれざるを人
比おこせて「かれにけるかまづの聲を春さちておどりありぬとおもひけるりか
前よ舉たり (清輔集) 云々 青きすちある紙よてかへるのりたをつくりて 云々

かへす 衣 (後拾) 秋上堀川 「たかをたの雲の衣を引りさねかへさでぬるやこよひか
るらん (万) 十六 「あきりひりおらそとの御のりあらをこそ吾も衣かへし給むめ
(後拾) 陸奥 「君がかを夜の衣をたかまへかへしやいつるひるくさしとて(續千)

戀二 祐清 「つらしとてうらももてきさよ衣かへせば人ぞ夢見えける (源 夕顔) 五十

「蟬のそもさちかへてける夏衣かへすをこてもねいかりけり (夫) 卅 (万) 七 よそ人
「こさもこ恋てそべかみ白さへの袖かへし、い夢見えきや (古今) 戀二 「いとせ

めて戀しき時ぬを玉のよるの衣をかへしてぞきる
かへるを (後拾) (いせ物) 七段 な「いとく過行りこの戀しきようらやましく
もかへる波りか (後拾) 旅 「そまのうらをけふ過行とこりさへかへる波よこ
とをつてま (源 明石) 「とへつるじまやもあれてうき波のりへる方よやをた
ぐへま (同 玉葛) 五 京の方思ひやらる、よかへる波もうらやましく (同 あり) 四

六 かの明石よかへる波よつけて御文つりまは
かへるさ かへさの 所よ附す

かへるで (和名) 廿四 漢語抄云雞冠木 加倍天 辨色立成云雞頭樹 加比留 今按是一木名
也 (万) 廿四 「こもち山若かへるでれもこづまで

かへる 佛名の時す、 (江次第) 十八 今夜羞栢梨 左近衛府攝津庄名也 以小大盤以
むる食物あり

下以折敷居之 (同) 裏書 承平元年十二月十九日 云 左衛門督恒佐卿先參陣羞甘糟目
日栢梨舍問其故左衛門督云昔府中將和氣以在攝津國之庄寄府名栢梨仰以其
地利充官人以下酒醪料于今傳其瓜故曰之 (年中行事歌合) 女 「つりへこちりき

地

利

充

官

人

まもりのかへかゝも身のいあへよなるぞ戀しき 詞書云かへかゝといふと左近衛府の柏梨の庄といふところより御酒を奉りて殿上にて勸盃の有也 (夫) 十八 とかへつる三世の佛の中の世をかへかへかゝとせ、めおきけん(新六) (同) 同衣笠 「あさましや佛の御名をき、さしてかどりへかゝのそとにさちけん(同) 同信實 朝臣 「もろひとのきみ(新六) 新六 をせ、むるかへかゝのよそひのそとに夜ぞふけよける 補 (助無智秘抄) 御佛名 殿上ニ柏梨ナスエテ公卿以下ニス、ム云々 柏梨トハ府ノ庄ノ名ナリ

かへらる(宇治拾) 卅一 さらくとりへらりて芋粥出まふでまおさりとといふ (同) 十四 提お湯せりへらりて

補 かへらる(万) 卅九 引のちら山中よれくりおきて還良布見ればこ、ろくるいも

かへおとり 替 (盛衰) 卅四 木曾の堅固の田舎人の山賤にて院宣をも事もせはさんトよふるまひけれも平家よのことの外は替劣して思召ける(同) 卅三 人倫の所爲とも覺えを遙まかへおとりたる源氏ありとぞ沙汰しける

補 かべくさ(万) 卅一 よひむろの壁草苺はおそしこまおね云々
かへさ(伊勢物)かへさに山かのかのせんとのおそしこまおね云々(源をとめ) 四十 かへさよわ

とらせ給ふ(榮紫野) 十 かへさもおかトことよて御覽せ(後拾) 春上 小弁 「山櫻心のま、よさづ終きてかへさぞ道れそとにいらる、(金葉) 秋三 宮 「天の川さくれよむねのこがるれむりへさの舟のりちもとられせ(玉葉) 冬小 弁 「をりしもあれりへさ物うき旅人の心ををりてふる時雨りか(千載) 春上 俊頼 「くれもてぬりへさのおくれ山櫻さぐためよきてまどふとりする(新六) 一爲 家 「秋の雨のやミガた寒き山風よかへさの雲のぐれてぞぬく 補 (金葉) 秋内大臣 家越後 「天河かへさの舟をかみりけよのりさづらもッねどもふをりり(新古) 雜上 行遍 「ちやくくぞりへさの月のくもりよ昔がたりよ夜や更えけん

附かへるさ(金葉) 戀下 師俊 「志の、めのあけ行空もりへるさの涙よくる、物よぞありける(千載) 春上 法性 寺入道 「かへるさをいそがぬそと乃道からむのどりは嶺の花は見てま(夫) 卅一 中務親王家 歌合源基長朝臣 「見たせはふみのむらの夕がをみさぐりへるさの道まよふらん 補 (万) 十五 十 「りへるさよ妹よ見せんよこさつこのおきつら玉ひりひて

めりか(貫之集) 「まちつけてもろともよこぢりへるさの浪よりさきよ人の立らめかへけんさん 壁見 (長門平家) 八信行 段 「さらものりかくとめんくあさ、やきつぶやきてりべけんさんよをすみあへり

補 かへさま (うのふあて宮) うへのそりまをかへさまに着

かへさふ (源 手習) 四十 猶ころの心やかくな思ふと心ひとつをりへさふ (同

をとめ) 二 寮試うけんよそりせのかへさふべきふいふをひだ出て一わたりよま

せ奉り給ふに (同 七) 十 事の心をさづねかへさふ事も待らで (同) 一けさや

かる御もてなふどのあらんよつけていをこがまうもやあとおぞうへさふ

(同 柏木) 七とく聞えりへさひおぞうをらふるとに

かへさひまうす (源 さかさ) 四十 せめてかへさひ申給ひてこもり給ひぬ (源 若菜)

上 卅 御賀の事云々 世中のいとあまよてか終てよりひやくを事のことづらひれなく

りめしき事の昔よりこのま給ぬ御心よてみかかへさひ申給ふ (古事記) 上 卅 至于

三年不復奏 (源 わかな) 上 卅 心ふりさまをのたまひつゞけしよえをくく

くもかへさひ申さでかん (万 卅 十八) 針袋とりあけまへに置かへさへれたのともお

のやうらもつきさり (源 わかな) 下 百 かとりかへさひ申されけるひぐくしきや

うみ院よもきこしめさんを (源 常夏) 十 おとやもねんころにくちいれかへさひ給ひ

んこそん

かへさひそら (源 めゆき) 廿内より御けしきあることをかへさひそらう又々仰よ

忘たぐひてかん

かへし (歌の (土佐日記) この歌をこれりれあされどもひとりもかへしせき (源

帝木) 卅 二 よそりけたるこそものしき事をかへしせねも情かへせせらん人の

もしたあらん

かへし (風お) (かけろふ日記) 三 雨よひそどよのとやりよふりて云々 ひるつりたかへ

し打吹てさる、顔のそらひ忘たまど (同) 四 「うちとの風をよすめれをかへ

しふくもれとらんり (金葉) 春堀川 春雨よぬれてたづねん山櫻雲のりへ

のあらしもぞふく (同) 下 戀 「雨雲のりへしの風の音せぬたもれとれ心あるべ

し (後拾) 兼俊母 あづまよ侍りけるそらりらのもとまたよりにつけてつりひける

「句ひきや都の花のあづまちの東風のかへしの風につけし (返一康) 吹あへすこ

ちのかへしよそりき都の花のあるべとおもふ (万) 一 山越の風の朝よひよか

へらひぬれ (同) 十 吾衣手あ秋風の吹かへらへ (常山風) 吹通ふを云

かべし (壁) 表の常の木丁の (發心集) 廿四 衣を厚きて薬を服てかべしをひき

さまし身浅いさなるに (江次第) 廿三 元日宴會身屋九間内四面壁代ノ帷褰之

(源 わかな) 上 卅 屏風壁代よりそとめあさらくもらひしつらひれと (源 タギリ)

五十宮の内をらひつらひ云々壁代御屏風几丁おほしませおぼしよりつ、(狭)二
上障子より通りてあまたたてかさねられたる御几丁ともよつたひつ、かべしらの
中に入りたちて見給へも(榮煙後)五からあやのこもんのかへしろゑをとかきてか
けめくらりさせ給へり補(うつろ嵯峨の院)三八かべしろととさうしとのわざまよ
とてり(今昔)かべしろのあひたにさか、さふしとり

かへしそで(貫之)三(新拾)「かへし袖まよひかく秋の田を鴈がねさへぞあま
りける(同)
こころある

かへしもの(袖中抄)六「あつまこととるの志らべぞかりしりもくへしもの
いおもひざりけり〇顯昭云此歌の中務親王琴のりてよとてつくりす伊勢がらへし
「かへしてもありぬ心をそへつれば常より聲のよさるるらんかへしものとい古
今神あろびの歌の中よとりもの、歌ひさめの歌々へしもの、歌とあげたり云古今
のりへしもの、歌といふの多くは催馬樂呂律のうと也さればかへすとハ催馬樂柏
子にふきかへしひきかへしてあさくらをうとふかるべし云々以上袖中抄前にわけたる
聲の條を引
てまつべし

かへしうた(万)一八玉きゆる内の大野は馬かめて云々。長歌の意を約め又ハ長歌
にわまれることを短歌に

ていふをかへしうたといふふた、び
こゝろをうちかへすよりいふとぞ

かへす(令歸)(古今)離別幽
仙法師「ことならも君とまるべく句のなんりへすハ花のうきま
やハあらぬ(源)うつせ六さてこよひもやりへしてんととる(同)わかむらさき八
人々ハりへし給ひて(同)わか六ん殿よりへしうつし奉らんととる一(万)十七
「とそりれとととこたへんをべとなく君が使をりへしつるりも

かへす田にいふ次のカへ
スの所にあり(拾遺員外)上「とりあへせ過る日數のちどもかくりへせ
、小田よさかへう、かり(古今)戀「あらをたをあらまきかへしつても人れ心を
見てこそやまめ(拾遺)上「さくら花ちりく春の時もあれりへせ山田をうらみ
てぞめく(夫)四千五百番後鳥羽院「花ハ雪とふるの小山田かへしてもうらまはてぬる春の
夕風

かへす色にいふ是もカへス(夫)十六六條
カへスの所をるべし「夕月夜をむる岡部の松のそをこどりよ
りへせ村時雨本の緑の色よ
するをいふ

かへす吐事をいふツク
といへるも同(榮岑の月)三湯のませおとすれどりへしつ、まどふ(同)楚
王夢九「よろづにか、えて御ゆ參らせ給へるへしつ、まどふ

かへすクレド、ドウモド
モウイク、度モ(續紀)廿二加遍須加遍須所念止母(伊勢物)八十
二段

て歌をうへはとせ給うてかゝ給へは(うつは樓の上)四十ノ限りなくへと悦び
 聞えさせ(同)四十かへととくさくなく仰せられしとちかどけい申さん(源
 きりつや)十三云々かへすとつれなき命よも侍るりか(同)同故大納言今のとある
 迄云々かへすといさめれり侍りしを(枕)七、かへすと聞ゆれば(同)同
 七、此君と稱せといふ詩をせんとて云々かへすと同トことをせんとて(齋宮)
 三「さりさまにいふとも何りつららんへと身をぞうらむる(古)一「から
 衣ひもゆぐれよある時なりへとぞ人のこひき(古)物名さ「花のいろはた
 一「さりりてけれどもりへとぞ露のうめける(拾遺)三(貫之)十(六帖)「忘ら
 る、時かけれを春の田をへとぞ人のこひき(公忠)七(新古)春上「春ま
 のと年あらんあら小田をへとぞ花を見るべく
 かと(和名抄)十二門和名所以通出入也(伊勢物)段をそりある所を門よりも
 えいらで(源)十命婦りこまきりてかど引いる、よりけしひあそ
 れかり(源)二御車いるべき門へさたりければ(枕)十、よる門つよくさせ
 かと事行ひさる(同)同門いさうかため(同)同おそ御門へさつやととをそれバ(榮
 花山)八女御の御事の後いと御門さしがちよて男さんたちをべてさべき事ども

まも出まらせ給え(万)十二門さて、戸もとちたるせいづくめか妹が入きて

夢よみえつる 柳の門。松の門。松たて門 門ちか 別に出す

かと(仁徳紀)一オノ字テかどト訓セタリ。轉テ心利タル (天武紀)七ノ簡諸才藝者(源末摘)

かど(新六)五、衣笠「おそろしやつけの枕のあらづくりかどある人のともはたの

かど(仁徳紀)一オノ字テかどト訓セタリ。轉テ心利タル (天武紀)七ノ簡諸才藝者(源末摘)

かど(仁徳紀)一オノ字テかどト訓セタリ。轉テ心利タル (天武紀)七ノ簡諸才藝者(源末摘)

かど(仁徳紀)一オノ字テかどト訓セタリ。轉テ心利タル (天武紀)七ノ簡諸才藝者(源末摘)

かど(仁徳紀)一オノ字テかどト訓セタリ。轉テ心利タル (天武紀)七ノ簡諸才藝者(源末摘)

かど(仁徳紀)一オノ字テかどト訓セタリ。轉テ心利タル (天武紀)七ノ簡諸才藝者(源末摘)

かど(仁徳紀)一オノ字テかどト訓セタリ。轉テ心利タル (天武紀)七ノ簡諸才藝者(源末摘)

かど(仁徳紀)一オノ字テかどト訓セタリ。轉テ心利タル (天武紀)七ノ簡諸才藝者(源末摘)

かど(仁徳紀)一オノ字テかどト訓セタリ。轉テ心利タル (天武紀)七ノ簡諸才藝者(源末摘)

かど(仁徳紀)一オノ字テかどト訓セタリ。轉テ心利タル (天武紀)七ノ簡諸才藝者(源末摘)

かど(仁徳紀)一オノ字テかどト訓セタリ。轉テ心利タル (天武紀)七ノ簡諸才藝者(源末摘)

かど(仁徳紀)一オノ字テかどト訓セタリ。轉テ心利タル (天武紀)七ノ簡諸才藝者(源末摘)

かど(仁徳紀)一オノ字テかどト訓セタリ。轉テ心利タル (天武紀)七ノ簡諸才藝者(源末摘)

かど(仁徳紀)一オノ字テかどト訓セタリ。轉テ心利タル (天武紀)七ノ簡諸才藝者(源末摘)

木六十こ、りこてんかぐよそりかきをこそりとかくけいきをめるの打見ふあ
あどくくけいきたちたれど(同)廿琴のねを、めりけんかどくくさも(同)と
こなつ七十りどくくき故もつけたどくくおがめくこともあらせど(同)朝か
ほ二廿君こそさいいへと紫の故こよかりら物給ふめれどすこくづらひき
けそひてかどくくさのを、み給へるやくるりらん才藝のうへにいふ詞也補(同)浮舟五十
かどくくきものあてともはるわらそ城(紫日記)りをもかどくくうあをり
いの人やとぞ見えて侍る

かどくく一但是の岩かどを(新撰)六帖二夫木廿二信實「岩の上のかどくくさも
あるものを人のこめるをいさまたにせぬ共に角だちた源きりつや十八弘いとお
いさちかどくくき所物給ふ御方よて

かどた門田(山家集)下「庭あがす清水の末をせきとめてりどさやいなふ頃よもあ
るりか(源)手習九門田の稻うるどて(夫)七顯輔「色ふりく門田の早苗かりまけりい
そは賤の男ふもこそとて(万)八四「いもり家の門田をみんとうち出こく心も
るくてる月夜りも(夫)十二經信「霧もる、門田の上のいなまたのあらわれわたる秋の
夕りせ(同)九藤原伊嗣朝臣「夕日さを門田のいな葉雨過ておれく露を秋くとぞとる

かどとりへ(新六)五行家「玉づきの道のつとへの門とりへ人のたよりもあけてこそ見め
あどならへ(大和物)六末あ、にとまらせ給へといひてりどからべよ家二つを
ひとつよ作りあせせたるをりけかるよぞとめける
かどむりひ(頼政集)下四「もろともいさ、そめりん極樂の門むりひるる所也けり
かどのり門の外和泉式部集上木幡僧都の家やけたる人づてよいひやる「出よける
りどのりをいあらぬ身いとふべ死ねどもささまぎよけり
りとう歌頭今の音源竹川廿一男踏歌せられけり云々其中よもすぐれざるをえら
せ給ひて此四位の侍従右の歌頭也(同)廿二りとうの打をぐいたる人のさきくさる
わざを

かどのをさ看督の長(職原抄)下十檢非違使云々當使補看督長六十六人此爲遣諸國
也。かどのをさの檢非違使の下司かり六十六人の一國一人を當さる也赤狩衣白
布袴を着て白杖を持て雜人を追拂ふとかり(狹衣)下十九いたう何をづり奉らばり
どのをさかどるきてこのかどつけさせん(つれ)二百かどの長の負さる鞆を
其家あかけられぬれを(宇治拾)七薄ウチノ所檢非違使云々金をばかどの長よもたせ
て薄うち具して内裏のもとへ参りぬ

増補雅言集 卷之十四 四十一

増補新編集賢
卷之十四

かどのーのさう門ノ師ノ（夫）卅六道生死輪廻心を花山院「かどのーのさうのをー
への薬苺らばこれかき世あまどひもてめや

かどのちるー（赤染集）三石山よまうぞー云々「そぎく〜ていくら斗り過てゆく
あまねきかどのちるーき、なん

かどまつ門（新六）一「けさひみをあづが門松たてなへていそふことぐきいやめ
づらある（夫）十八待賢「山がつのそとの松もたて、けり千とせといそふ春のむ
らへよ（同）同千五百「あそをまつあづが門松さきさて、けふより春の色をみる哉（同）
同後京極「千代ふべき松さへ山を出しけり春をいとなむ賤まひりれて（同）同後徳大「年
くれて今ぞみ山を出すかるり終ていそひの賤の門松（同）同堀百「門松をいとあみ
たつとする程に春あけがたあ夜やなりぬらん補拾玉四「今よひより春の門松立ち
くせつものつらき年もちるもん（拾員外）上「門ごととに千世の春とやいそふらん
松さるーづのおのがさま〜（山家）上「門ごととにたつる小松よかざ、れてやとて
ふやとよ春の來よけり（爲尹卿千首）「今朝のまたみやこの手ふり引りへてちひろ
のみーめーづが門松

かどまもり（夫）卅信實「くり小田よとてるそをつのかひもか〜いさづらから門ま
もりせよ

かどふ（白氏文集）卅。詞律 依々嫋々復青々カドハシヒケル勾引春風無限情カドハシヒケル（新撰字
鏡）詠如止今按スルニ字書ニ詠誘也許也トアリ○眞淵ガ伊勢物語古意ノ中ニカミ
ツケノ馬カドヒトイフコトナイヘルモ此語ヲトレルカ（尺素往來）山賊海賊ヒトカドヒ勾引
（万）十四「あーがりのわをりけ山のりづの木のをりづさねもりづさりむとも（同）
十八「りさ思ひを馬にふつまよおせもてこ〜へよやらを人りさもんりも此カタ
十七「ハンも同ー語なり（後撰）中（六帖）「山風の花の香かどふ麓よも春の霞ぞた〜か
りける（四季物語）二月所老たる終こまの野よすむなど人の子をうさひある人へのめ
をかどそしてむくつけきものかり（義經記）九「のどり〜まゐらせ御供して秀衡
の見参よ入

かどで門（さら〜日記）九月三日かどでして（夫）卅後徳大「世をそむくかどで
ひ〜り大原やせりふのさとの草の庵あ（古）滋春「かりそめのめきりひちとぞ思
ひこ〜今〜かぎりの門出也けり（源）二「やがてわりるべきかどでよもやといみ
どう覚え給へば（散木）上七（金葉）「あ〜火さくまやのすみりの世中をあくがれそ
むるかどでありけり（夫）十五「色々の木の葉たむけて秋のけふいく田の森よかど

でちよけり(清輔集)(夫)二春「片岡よ谷の鶯かどせしてねをらへーよ口をさふをり(夫)卅六「かきたえてみつまかりぬこれやさ心づくーのかどであるらん(新勅)釋教「さひりかく入日をみても思ふりかこれこそ西の門出也(補)(方)

甘ノ卅とりよそひ門出をすれば三長歌

かどめくカドアル。カド(源 わうな)四卅物のみやびふりくかどめき給へる人よて(同)末つむらうくどうかどめいさる心をかきかめり

かどひろく門廣。(河海)に于公の事引せ玉ふ誤也(源 幻)十八夕霧のゆ子そこよこそ門のひろけ給めかどの給ふ(源 薄雲)卅かどけかくとも猶此門ひろけさせ給ひて待らせかりかん後よもかきまへさせ給へかど聞え給ふ(竹取)二此世の人の

男の女ふあふ事をせ女へ男よあふ事をせ其後かん門も流行本ナシ廣くもなり侍るいりせさる事をくつていおそいままさん流行事

かどもり御門カド(衛門式)八丁門衛(源 朝うや)十御門もりさむけかるけそひ(和名抄)九文字集略云閨音 閨人和名美加守門者也

かどひ(和名抄)十八門燎周禮云喪設門燎俗云門火顔氏家訓云喪出之日門前燃火

かどすゞみ(夫)九慈鎮 「いづの男がふけぬくやみの門すゞみこのもちりらぬまとる

かりけり

かち福(堀次)戀隔月(夫)廿二仲「かちをむるちりまのみをけられせて、あひ見でせ

ぎし神を月りか(夫)卅一範「君り代のちりまの市におくりちの千とせをへても色やまさらん(同)同如願「秋くれはちりまの市にちりちの深き色をる風の音りな

(同)卅三布中務「ちりまをる市女がもてるかち布の色ふろくのち人をこむつ、補(職歌合)「ちりま川逢瀬もいつとちぎらぬまあかち人のこひりるらん

かち行(方)十三さうつまのかちよりゆけき(同)十一拾遺戀「山科のこもされ山を拾遺馬のあれどかちより吾く汝を思ひうねて思へば拾(源 タウヤ)卅君よ馬へ奉

りてわれのかちよりく、りひきあけあどして出さつ(同)玉かつら十ことさらよりちよりと定めり(榮 花山)十四いりて花山迄道をちらせ給ひてかちよりおそいま

けんと見奉るよ(狭)三ノ下十二 すべてかちの人かいらさーいづべうもあきにくく身のからんやうもちらせ同どうへよかさかりさるさまいとさびけ也(い

せ物)六十九段「かち人のわこれぬれぬえまーあれバ(夫)廿五「白妙のあがらの瀆の霜の上よあとささりかるけさのかち人(狭)四ノ下廿五 此をどよと立こもる物見車と

もかち人どもちちささまでおそりり(夫)卅一千五 百後京極「かち人の道をぞ思ふ山一かの

こもとの里の秋の夕霧(散木)廿七「ちこてる諏訪のとかりのからわさりうちと
けられぬ世よもふるりか(夫)廿四(現)六信實「からわさりやその河よと行駒は浪も
せこの五月雨の頃枕(二)あやしき女さよ云々トめつりさかちありきゆる人
かりりきたまさりよいつささうぞくかどをくりしてなまめきけさうトてこそあり

いりそれ物まうでをぞせし説經かどいことよおおくもきりざりき云々補(同)二
三)かち路もまといとれそろいされとろれいりよもくつちよつきさればいとた
のもしとおもふよ(平家物)大覺寺より六波羅までかちたしよてぞまるりたる

かち 櫂。万葉よの舟の櫂を梶とよみて今梶といふ物をばよます八(和名)十櫂和名
加遅
使舟捷疾也兼名苑云櫂一名橈也(万葉類林)四集中例櫂をカチとよめりろといふ
い和語をらねバ共カチと稱しけるなるべし(万)七ノ「さよふけて堀江こぐかる

松浦舟かちの音高しををまやみりも(夫)十二家「雁が終へふねの山やこえつら
んかちりけさりと天つ聲する(同)廿三後九「いそがでや梶ひさをりて舟人もあそ
あなるとの汐やまつらん(同)信實「うさねいて枕とたのむふかばよまたまからべ
たるうちもありける(同)同(万)十「青波は袖さへぬれてこぐ舟のかちふるやどよ

小夜ふけあんり(同)同(六帖)題トマリ舟「湊江よかちふりさつる泊をふねかがる
、迄は汐のちきぬ(夫)廿三俊成「いそがくれまりちいけぬきまぐ舟のまやくうき世
ををかれよしりか(同)同(新六)四光俊「波さてるぬさの追風をやければまりちえけぬき
わさる舟人(夫)廿三為家「あへまやとさる舟のからりちのからきうき世をいをれ
てぞふる(後撰)戀二「白波のよするいそまをこぐ舟のりちとりあへぬ戀もさるり
か(夫)廿一高遠「島づさひとわさる舟のかち間よりれつるいづくやさうたまの橋(同)

廿三後鳥羽院「風をやと沖こぐ舟のかち間よもわさる間をかき世々の故郷(同)廿三為家「契
りこそゆくへもあらぬゆらのとやさたるりちをの又も結をぞ(續古)人丸「さよふ
けて堀江こぐかる松浦舟かち音さうりしををまやみりも(堀太)顯仲「見るめりるあ
まの笥やのりち柱しをうらみぬときまもか貞徳云カチハシラハ
タカヤナイフ云々(新古)小町

「そまのあまの浦こぐ舟の梶をさよよほばなき身ぞかかりりける(万)二四十一ゆく
舟の梶引折而(万)六長「これいぞこふる船梶をな(後撰)野小町「あまれをむ浦
こぐ舟のりちをかみ世をうみこさるこれぞりなき

かち 櫂。今カウツと(和名)廿三穀玉篇云櫂穀木也和名
加知(古語拾遺)二穀木種殖之以
作白和幣(新古)秋上俊成「れをばさのとわたる舟のかちの葉よいく秋かきつ露の玉づ
さ(夫)十嘉元元年入道前太政大臣「かきつくる梶の七葉の思ふこと猶所まりある秋の夕くれ

さ(夫)十嘉元元年入道前太政大臣「かきつくる梶の七葉の思ふこと猶所まりある秋の夕くれ

さ(夫)十嘉元元年入道前太政大臣「かきつくる梶の七葉の思ふこと猶所まりある秋の夕くれ

さ(夫)十嘉元元年入道前太政大臣「かきつくる梶の七葉の思ふこと猶所まりある秋の夕くれ

さ(夫)十嘉元元年入道前太政大臣「かきつくる梶の七葉の思ふこと猶所まりある秋の夕くれ

かぢ加持(源 わのむらさき)六かぢなど参る事と日とくさしゆぐりぬ(同 さまとら)
六かぢ参りささぐ(同 手習)十夜ひと夜りぢい給へる(榮 初花)御物のけどもさま
トウりうつあづりトは加持一の、一

かぢ鍛冶(和名)八、鍛冶四聲字苑云鍛冶打金鐵爲器也俗云鍛冶訛也(枕 六)あつけ
なる物六七月の云々又れなト頃のありねのかぢ(うつは 吹上)下ノこ、ハちろか
ねこかねのかぢ廿人バのゑるてよろづのものうまぐをりひつなとつくる

かぢ(和名)廿周易說卦云其於木也爲堅多心師說多心讀奈賀古可遲。是多の字を訓せり。其物の多きをも他物の其所
よ多きをいへり(源 すま)六 大貳ハ云々いりめう類ひろく娘がぢよて(同 をとめ)
。八カギ(ひ)の部

五十 御せん四位五位がぢよて六位の殿上人などハさるべき限りをえらせ給へり
(同 桐つや)初 物心をけし里がぢあるを(狭衣)三下若官ハ事つけ給ひて殿がぢよ
のこかり給ふを(源 てならひ)廿かよひ給ふやうかれと心もとめ給ひて親の殿が
ぢよかん物い給ふとこそいふかれ(狭衣)常ハ院がぢよおましませま大宮齋院の所よ也(源
早わらひ八こ、がぢよおましませしつきていとようをみなれ給ひあされま(同 夕顔)

二 小家りぢよむづりけあるわさり(枕 七)正月ハ寺よこもりさるハいとく寒
く雪がぢよ氷りさることをりけれ(同 八)五月の御さうトの事と云々朔日より

雨がぢよてくもりくらをつれトあるを云々(源 蓬生)十 雪霰がぢよて(枕 七)十一 桃
の木わりさちていとちもとかぢよさしいでさる(狭)三ノ上 深き谷よりおひ出さる
木どもの根の苔がぢよ打物ふりさるけしき(枕 九)九ノ上 木垣根といふ物の云々花
ハまさよくもひらけちてせつぢみがぢよ見ぬるを折らせて(同 九)十 つけひりさめ
さる筆をあやしのやうハ水がぢよさしぬらして云々(同 十二)七きぬがぢよ袖口あつく
見えたるが馬よのりていくま、よ云々(源 わりか)上 御ぐりの云々をそがぢよ形ノ
いとそくさ、やりよて(枕 七)三、冬の直衣の着よくさしや所らんうへのきぬがぢよ
て(抄)ヨノ常ノ束帯ニハ袍ニ下ガサチアリ是ハ袍ニ下襲ヲ除テ指貫ナルヘシ是ヲ
衣冠トイフ也(源 すま)五十 ゆるし色のきかぢなるよ云々 打やつれて(同 蓬生)五くづ

れがぢあるめぐりの垣を(同 松風)七 み捨がたさたまのさまを又ハえしもりへらトク
しとよする波よそへて袖ぬれがぢなり(枕 十二)八 見ぐるしき物ひけがぢよやせく
ある男とひるねしさる云々(源 末つむ)廿 猶しもがぢあるおもやうハ(同 葵)五十 お
よすけて御笑がぢよおもしろも哀かり(同 夕顔)五 せらろよ涙がぢあり(同 うつ蟬)二か
がめがぢあり(同 葵)四十 いとつれトハかめがぢちなれど(同 わらわ)十五 かけき
がぢあて物い給ふけしきかど(同 しの)十 さるハ身よしむさりり覺さるべき秋風

増補雅言集覽

からねど露けき折がちよてまぐし給ふ(同 榮)廿九かさのらさびくして時しもあれど
ねざめがちある(同 まさこ)一(八)ちりき年頃とかりての御中もへど、りがちよ
て(同 夕顔)三十物めがちありと(同 若むらさき)五十人もうらまがちよ(同 三)をつく

一(卅)御行ひがちよあり給ひて(同 若むらさき)四十へりまがちあて出給ひぬ
かちのやまひ 瘡瘍(和名抄)廿三病源論云瘡瘍乃俗云加知乃也万比渴而不小便也

かちとり 梶取(和名)十一(和名)二、(和名)梶師(和名)知止利(土佐日記)十五 かちとり物の何れもち
らで(方)七「浪さくしりいりよ梶取水鳥のうきねやまべきか不やくくべき(夫)廿六(夫)行家卿
「こ、ぞあをついまのわたり浪あらしりいりよ梶とり心ゆるまか

附 かんどり(枕)八ノ三、えせ物(物)の所うるわとりする折のうんどり(主稅式)廿二(一)挾抄(續紀)廿二(挾)
抄(景行紀)遙視火光天皇詔挾抄曰直指火處

補 かちを 梶緒(新古)二、(好忠)「ゆらのとをわさる船人かちをさえ行へもいらぬ戀のこ
ちりか(松屋叢考)云(藻鹽草)宗かちとさえハ梶の緒の切さるかり。(狹衣)「かち
をさえいのちもたゆとあらせまや涙のうとよいづむ舟人。(調度歌合)ナシ「かち
をたえまかをきれぬとあらせまや舟さよする浦さよして。(夫木)卿「契り
こそゆくへもいらぬゆらの戸やとさる梶緒の又も結もで。(十六夜日記)梶緒絶さ

る舟よ似て云々(續古)維中小「ままのあまうらくく舟のかちをたえよるべ
かき身ぞかちりりける(新千)維中「久方の月のりつらのかちをたえふけてとこ
さる天の川舟(玉葉)維二土御門院御製「かちをたえ大海のそらふ行舟のあとをりもあき世
をいうよせん(新古)戀一攝政太政大臣「かちをさえゆらのとまよによる船のたよりもいら
ぬ沖つしそ風(月清)上「今ひとて涙の海よかちをさえ沖あわづろふ今朝の船人
補 かちうつかち 梶打浪(輔親)「ふかちあひりちうつ浪よ夢さめて都のおとを見さ
いつるりか

補 かちおと 梶音(更科日記)夜いさうふけて舟かちおとときこゆ
補 りちま 梶取間(方)十八「たるひめのうらをとくふねりちまよもあられとぎへを
とすれておもへや(同)十五「あまぢいとわたる舟のりちまにもわれハとせれせ
いへをいぞおもふ

補 りちまくら 梶枕(千載)羈旅(俊成卿)「浦つたふいそれとまやのりちまくら聞もあらそ
ぬ浪のおとりか 美濃家裏折添言苦屋ハかちまくらよかなと
そいそのうきねなどよまれざりけん 廣足按(散木集)ハ伊勢
へまうりけるみちにて何のといふ所よてあまの家にとまりてよめる「いせのあま
のとまやのとこれりちまくらあらふさをよめとさまいつるこれをおもへばとま

贈補雅言集覽 卷之十四 四十六

くきりへかどして(同)未つむ四かりよもおそしりよせんせとがめ給ふべし人なり

かり許云々のもと(万)八「久方の天の川瀬舟うけてこよひり君がわがり來ま

さん心の添を添て(拾遺)貫之「思ひかねいもがりゆけバ冬の夜の川風さむと千

鳥なくあり(いせ物)段八昔紀の有恒がりいきたる源わうな七上七小侍従がり例

の文やり給ふ(同)浮舟六文の大輔がりやれとの給ふ(榮)楚王夢九廿かの故左衛門が

りの後物などつりもしたれば左衛門の内侍いと哀し思ひけり(落く)一をその

殿原宮づりへしけるが今ハ伊豆守の女よてるたりけるがりよ文やる(拾遺)夏家

さきて侍りけるかぞしこを人のりりつりもしける(落く)二今見給ひてんとてさ

ふらひよ出給ふ少一のがり文やり給ふ(榮)衣の珠廿廿がめのとの尼君のがりさ

のぞかせ給ければ(宇治拾)三供の者三十人をもり具して國司のがりむらひぬ(同)

三ノ大藏の丞とよりけと名のりてうへからぬ女のかり御文もつりもしける(つ

れ)段九十やすう殿れがり罷りて候といふ(和泉式部續集)野老のあるをおやの

がりやるとて(万)九廿二「つくもねのすそわの田るに秋田るいもがりやらんも

ちたをりか(同)十一「あめにあるひとつ棚橋いりでめくらんわくくさの妻がりと

へバあゆひすらくを補(万)九廿一妹等許今木の嶺よみたてつるつま、つの木もふる人

見けむ(枕)廿三人のがりやりとるよ(同)宮づりへさるがりやりていつりとおもふ

よ(同)六四「いりとる人のがりか不ざりにりきてやりたるよ(小大君集)云々 あさみ

つの少將のがりやるを云々人のがりやるとて(同)かぞしこを人のがりやるとて(蜻

蛉日記)兼家「いづくともわりぬ心いそへたれとたびいさきよ見ぬ人のがり(和泉

式部)冬のもてつりた雪のいさうふる日人かりやる(散木)下臈よこえられてな

けき侍けるころ人のがりつかいける(同)女のがりつりいける(同)人のがりつ

りいける(小大君)くまを女を女のがりやるとて(同)人のがりやらんとて(金葉)

戀下よミ「あふことのか野今ハなりぬればおもふがりのと行よやありけん(和

泉式部續)をとまの女のがりいきて(万代)前攝政太政大臣「君くりと山路を分てく

るわれを花をたづねと人を見るらん(大和物)八段「院より給いせん物もりの七

郎さみがりつりいさむ(月清)「君がりとうきぬるこ、ろまよふらん雲いいくへ

ぞ空のりよひち(宇治拾)七「やくそくの僧のがりいきて

かりい不カ「ミやま田のおくての稻をりりつとて守るかりい不よいく

夜へぬらん(万)十五「秋田かるかりい不つくり庵してあるらん君をまんよもが

も(夫)廿家「されうこん山かけふりき夏草にまりせてむさぶ露れかりい不(同)九

「かやり火の煙さりりやちらるらん山ぐまねの柴のかり庵(同)」卅定家「小山田の露の

かりいはのやどりや君をたのまんいかづまのりけ(續拾)」秋下「露霜のおくでの

いなば色づきてかりいはさむき秋の山風(万)」一「うちの都のりりおおもゆ(これ)

りり(夫)」十八俊成「おぞつりかたりへる鷹もいりからんかりその小野の雪くれの

そら(同)」十八慈鎮「あはれかる狩場のをの、とち哉思へばこれやつとの通ひぢ(同)

十八家集狩場雪為相「芹川のむりりのかりばあとふきて谷のこのこれる野への白雪(同)」同

俊成「そりなりやたり野の原よとつきまそえぬかりさとつらとるらん(新千)」冬前

大「そり鷹のをふさの鈴れ音まきくりりそのみゆき跡ふりつ、(万)」四穂田の

刈婆加とある刈比といふ義よて今といことなり

かり(和名)奴袴漢語抄云絹狩袴或云岐奴乃枕(四)老たる女の法師のい

ととくそ、けたるかりさりまのつ、とりやのやうおほそくみとりきを(金葉)

連「かりさりまをばをいとおもひて

かり(種)「長秋詠藻」中「かぞいらは秋のかりををつきてこそおそくら山の名おもお

ひけれ(夫)」廿紀方匡房「足引のいたくら山の峯迄もつめるありををみるがうれい

さ(新六)」二行家「秋の田の刈をのそくみいたづらにつみあまるまをよぎむひしけり

かり(假)「續後撰」定家「やどりせりりその萩の露ばりり消かて袖の色よ戀つ、

(後撰)下「秋の田のかりその庵の筈をあらみ我衣手の露にぬれつ、(夫)」七「雨

ふる假庵につくるいつのまよかこの汐ひま玉ひひろむ(夫)」卅隆綱朝臣家歌「い

かききや山田もるをのりりおてねぬ夜の敷をいく夜へぬらん(夫)」卅「(万)」廿「(万)」

「たらちねの母をわかれてまことわれさびのかりおやそくねんりも(夫)」卅旅

雨嘉應二年「りりおさすからのかれその村時雨哀まさすの音そりりり(万)」卅

十三「秋田るりりりをつくり我をれりころもでさむく露れきまけり(六帖)」二

「とやまこのおくてのいねをそりさびてまもるりりりよいよくよへぬらん(後撰)」秋中

八「秋の田のりりその庵の匂ふまをさける秋萩みれどありぬも(万)」卅秋田り

るりり庵の宿り

りり(所)「かりの所

りり(狭)」三中「きりせせやとこ世をかれ雁がねの思ひの外おこひてなく

ねど(新拾)」卅貫上「うゑし袖またもひかくよ秋の田のりりがねさへぞ鳴わさりける

(万)」十九「燕くる時よありぬと雁がねにくにおもひつ、雲がくれなく(新勅)」伊勢

「風さむみなく雁がねの聲およりうたん衣をまつやうさま(万)」十「秋風よ山と

増補雅言集

びこめるりりぐねの聲とそざりる雲り、るら

かりようびんり 迦陵嚩伽 迦樓頻(和名抄)四ノ十二沙陀 或譜云天竺二語也漢云教

鳥其鳴時聲中傳苦空無我常樂我淨之義故名教鳥也極樂淨土鳥也妙音天淨(翻

譯名義集)十五 正法念經云山名曠野其中多有迦陵頻伽如是美音若天若人緊那羅

等無能及者唯除如來音聲(源 紅葉賀)初 これや佛の御迦陵頻伽の聲からんと聞ゆ

かりた刈田新續古秋下公 一鳴のさつと音もさむく成よけりかりたのおも霜やお

くらん堀太曉源 一曉よなりよけらるる我門の刈田の鳴もなれてさつ也(夫)二(新

六)信實 一そやそまべかり田のお物とまの足いおおせ鳥の聲いとぐかり(千載)

秋下 一さぐ門のおくてのひよ驚きてむろのかり田よ鳴ぞ立なる(抄)ムロノカリ

兼昌 ヤワセナドモイヘリ早稲ニ 一早苗とるやそのさりのかさあらしこぞの

かり田の淋しかりけり(新六)二知家 一秋もてりりりこのひつちいさづらよそよ出れ

とも守る人ぞなき續古冬後京 一霜うづむ刈田の木葉ふもいさ死むれる雁も

秋をよふら(玉葉)冬式子 一旅まくらふいその里の朝ぞらけ刈田の霜よさづぞを

くかる(同)同 一つら、ある刈田の面の夕ぐれに山もととそく驚きたる見ゆ(新

續古)師光 一きく人もかくて時雨や過ぬらん刈田の庵よ雲ぞかゝれる(隆信集)一か

くばりりふりきちぎりをしぎのふすかりさよたてるななきりトとや

かりそめ(新續古)夏恒 一おけさのみひとよまさる夏くさのかりそめまたにとふ

人もか(いせ集)四十 一かりそめよそめざらまをから衣かへらぬ道をうらみつ

るりか(源)わの 一おそしと先ぞかりる、かりそめのさるめいあまのすさひ

かれども(古)貫上 一難波がさおふる玉藻をかりそめのあまとぞこれいかりぬべら

かる(源)帝木 一東おもてもらひあけさせてかりそめの御まつらひいさり(同)夕顔

七、かりそめのかくれがとよさみゆめれば(同)朝顔 一かりそめのやどりをえ思ひす

てき木草の色も心をうつそよと覺いあらる

かりろめ(風雅)旅山階入 一露かがらむおをさ、のりり枕りりろめおの

いくよへぬらん(後撰)戀 一秋の田のかりそめおもてけるりいとづら

いねを何よつま、一(順)三 一吳竹の夜さむい今いおをぬとやかりそめおの志ちのそい

たしく(夫)百顯昭 一も、よ草も、よ迄かどたのめけんかりそめおの志ちのそい

りき(堀太)田家 一小山田の稲葉の露を打もらひかりそめおをいくよいつらんぬ

(夫)卅二法 一かや枕かりそめおのさびしきによその嵐ぞ友とかりける

かりつら(父)父子相迎 一六道蹤横よかりつらひよーくバ

増補新編言海集

かりね假寐(新古)夏式子「わそれめやあふひを草よ引むそびかりねの野への露のあけ

ずの(玉葉)旅内大臣「むそびおく宿こそりねれ草枕かりねのおかトよなくの露(千

載)戀三皇嘉門院別當「難波江のあいのかりねの一夜故身をつくしてや戀わたるべき(夫)

六為實「必とちぎらぬ人の花をそれされ故一夜ゆるそかりねぞ(夫)卅一喜多院入

とびつ、もかくていく世を過ぬらんかりねをらぬいさきの里かりねの床(千

載)夏雅頼「都人むきなつくしそあやめ草かりねの床の枕をりり(續千)旅經繼「夢を

たよむすびもそてせ草枕かりねの床のよの嵐(かりねの夢(風雅)旅光明峯「さ

、のそのさやの中山かきよもかりねの夢むそびやする(續後撰)旅公綱「あら

いふく岑のさ、やの草枕かりねのゆめむすぶともなかりねの枕(源夕霧)「秋の

野の草のそけいひさけいりどかりねの枕むそびやせ

かりうつせヨリマシの(源手習)十人よりりうつして何やらの物のかく人をまどの

いさるぞとありさまをりいせせますうて(榮初花)御物けどもさまよりりう

つあづりりくは加持の、いさる

かりうち(和名抄)四五、樗蒲一名九采内典云樗蒲和名加利字知

かりのいりり(夫)卅後京極旅御哥中「あけ方よかるや白露敷をひぬかりのいりりのあいのそ

されよ

かりのそでろも(夫)十二「とこよいそ一日りせよいりよ夜やさむき都よさる雁

の羽衣(同)清正「とこよへてりりの羽衣さむきうへあ心してふけ秋の夜の風

かりのよまづさ(古)秋上友則「秋風は初雁りねぞ聞ゆあるたが玉つさをりけてきつら

ん補(玉葉)春上賀茂重保「かりがねのもみちよかけ玉づさを花よつけてやもてりへる

らん

かりのつりひ狩の鷹の使(夫)卅五(新六)二「明のまよさりひへさて、伊勢島や

かりの使のゆきやわりれん(いせ物)六十むり男ありけりろの男いせの國みりり

のつりひいさけるよ

かりのつりひ雁の蘇武カ(万)八四「九月のその初雁の使よも思ふ心ひきてえこぬ

りも(同)十七「雁がねの使あこむとさわくらん秋風さむみ其川のべ(漢書列傳)四十

蘇武字子卿武帝時以中郎將持節使匈奴單于欲降之迺幽武置大害中云々昭帝

立匈奴與漢和親漢求武等匈奴說言武死常惠教漢使者言天子射上林中得雁足

有係帛書言在某澤中由是得還補(万)九十二「春草を馬咋山ゆてえくある雁の使の

やどり過なり

かりのまど(源 夕顔)十 御さうぞくをもやつれたるかりの御を奉りさまをりへ
顔をもそのみせ給(せりきぬ)也とあり
かりのもの(源 たらひ)十 まことに人の心まといさんとして出きたるかりの物よ
やとうさぐふ

かりくら(夫 卅)六(新六)二 信實 「ま、やとくこらがつとひの山まつりけふのかりくら
むかゝからめや(新六)まゝやとて云
やむなうらんや

かりや(假 散木)中 十九 下りさまよ 云々 かりこよ守爲隆がかりやあど作りて御まうけ
あどしけるよ二三日斗あそいせ給ひし事など思ひ出て(著聞)卅一 福原まで持經
者千僧まで法花經を轉讀する事ありけり(云々) 濱まかりやをつくりて道場ませられ
りり(續古事談)一池の中島まかり屋をさて(夫)卅 西行まきのう 「杣人のま死

のかりやのあたふよ音る物ハ霞かりけり(夫木)まのうり 「隣るぬそたのか
りやにありま夜は鹿あはれなる物にぞありける(金葉)夏 雅光 「よもすがらもろか
くさ、くくひかりをさせるともなきしものかりやを

補 かりやかた(拾愚)中 「大井川夏まことにさまかりやりたいくとせり見るくらま
梓を

かりやま(黄 和名抄)十四 刈安草染色
具

かりまた(雁 宇治拾)十二 かりまたをつがひふた、び腹をい
る

かりまくら(假 枕)夫 卅 (新六)五 光俊 「かまをちのまよふの小やのかり枕夢まなして
も

人まかたるな(八月十五夜歌合)卅九番 保季 「月やどる床ハ草まの假枕おきあへぬ露
まのべの秋風

かりふ(刈 好忠)秋十 生 「櫻麻のかりふの原をけふ見れも外山うたけ秋風をふく(夫)
廿八 爲家 「櫻麻のかりふの跡の蓬まどうつりゆく世のまどいりまき(夫)廿 (現)六 鷹
爲家 「まひてこそ猶りゆりめいせせの、萩のかりふハ雪ふりくとも

洞院 攝政 「まひてこそ猶りゆりめいせせの、萩のかりふハ雪ふりくとも
かりぶ(假 臥)夫 卅四 爲家 「神がきのいとまのうへのかりぶよまらねの昔をあらふ
みやつこ

かりこ(狩 人)夫 卅六 久安百 也 「情をかきかりこの耳よさをうりのこよひの聲をいり
できりせん(和名抄)九 列卒文選云列卒満山 和名加 利古

かりころも(六帖)五 下 「かり衣心のうちまよさかくにまどりみたれて物思ひする
(いせ物)六帖 五 下 「翁さび人かとがめをかりころもけふもけりりとぞたづもあく
なる(夫)十三 信定 「草の葉ま袖つくみちのかり衣いりる露の色よそむらん

かりこも刈(方)十五、「くり薦のひとへをいきてさぬれども君といぬれば冷雲梨

(同)十一廿九「こきもこよ戀つ、あらぎのりり薦の思みたれていぬべき物を補(風雅)

雑上「見ぐくきていけみい見えぬ五月雨ようきてのこれる濱ばかりこも

かりで 契沖説「笠頂てをいふといへり。笠のかりての所は注せ

かりて 借代(方)五廿八「つねいらぬ道の長てをくれくといりにりゆるん可利互に

あしよ

かりあと 刈跡(夫)廿八 知家 「皆人の笠よぬふ草のかりあとの世よはけもあくなりよ

ける哉

かりさうぞく 狩装東(枕)八二ノ其まもに殿上人よりききんたちかりさうぞく直衣を

ともいとをりくして(狭)五四上例ならぬかりさうぞくにやつれ給ひていりよぞや思

ひみたれ給へるさまの

かりきぬ 狩衣(和名)十九 布衣袴此間云藉衣加利岐沼(いせ物)初 かりきぬのすそをきり

て歌をりきてやる(はれく)四十狩衣よきさうぬきいと故つきさるさまよて

かりぎぬ 借衣(夫木)廿三 顯國 「我戀のまづのかり衣おのが身あはぬことをもかけきぬ

るりな

かりきぬはりま (宇治拾)十五 下種のかり衣袴をき給ひて

かりきぬすぐと 狩衣(源末つむ)七 あやしき馬は狩衣姿のいけろよてきけれを

(枕)七ノ 直衣指貫をまゝのひとへなど着るも狩衣姿よても 云々(同)五三 鞞負の

まけの夜行狩衣姿もいといやいけかり

かりみや 行宮

かりいそ (夫木)廿二 爲家 「まりのうらをちの濱田の対いはよ色づくみれば秋さちよけ

り(新六)光俊 「浦風は濱田のをいね打おびきせやうりいそよ成ぞいよける(清輔集)

田家 「かりいそのをそのもの麥も朽ぬべいそをべきひまもみえぬさみされ

夏雨

かりびと 狩(和名)九ノ 獵師一 謂藉者和名加雄略紀)九 藉徒(方)六十四「足引の山

よも野よもみかり人ともやたまさみみたれさる見ゆ(千載)戀五「かり人ひとがめも

やせん草いけみあやし死鳥の道のまたれを(夫)廿六 眞萩さくみやぎの原の白露

をあさふまをらんかり人ぞうき(夫)十八 爲家 「あづの、どたちのす、死ふこいさ

朝霜さけて出るかり人(和泉式部集)上 「野邊よ出るこりりの人よあらねどもとり

あつめてぞ物いりあしき

かりびさし 假(夫)廿 太宰 鹿(夫)爲經卿 「さえあらしき、やの庵のかりびさしとさしひとへかる

